

## 朱子の性理論 (二)

青木晦藏稿

### 第十六節 氣質の性

余は以上に於て朱子の所謂本然の性に就てその定義、根原、内容及びその善なる所以の理を述べたれば、此れより更に朱子の所謂氣質の性が如何なる意義を有するか。又本然の性と氣質の性とは果して二性の存在を意味するか。將た本然の性と氣質の性とは如何なる關係を有するか。人生の罪惡は何に根原して生ずるか等の問題に就て考察すべし。

(甲) 氣質の定義。上文に言へるが如く本然の性は氣質形體の中に存する性を意味するものなれば別に氣質の性の定義を擧ぐる必要なければども、今假りにその意義を擧ぐれば

氣質の性は氣質形體の中に存する本然の性を謂ふ。

と云ふことを得べし。朱子が「大抵人皆有此形氣。則是此理始具於形器之中。而謂之性。纔是說性。便已涉乎有生。而兼乎氣質。不得爲性之本體也」。(朱子全書卷四十三、十五頁)と云へるを見れば此の定義は朱子の意に反するものにあらざるべし。蓋し理は氣を離れず氣は理を離れず理氣俱

に存するは宇宙の原則なれば、吾人の性氣亦同じく俱存のものにして性は氣質を離れず氣質は亦性を離れず。故に現實に在りては性は氣質の中に存して氣質の外別に性あるにあらざるなり。而して此の定義を以て誤りなしとすれば此の定義の裏には凡そ三箇の意味の存するを見るべし。

(第一) 吾人の形體を組織せる氣質なるものは宇宙に存在する氣質と同一にして、宇宙の氣質即ち吾人の氣質なることは性の宇宙に於ける理と同一不二なるが如し。而して性は本體にして平等無差別のものなれども、氣質は現象にして差別不平等のものなること亦宇宙に於ける氣と異ならず。

(第二) 吾人の性は氣質と共に賦與せられたるものなれば、氣質の在る所必ず性の存せざることなく、氣質と性とは同在俱存のものなり。故に現實より云へば獨り氣質の一性あるのみにして別に本然の性なるものあることなし。然るに此れは不離の方面より見たるものにして、不雜の方面より云へば氣質形體の中より特に性(即本然の性)のみを抽象して云ふを得べし。之を名づけて本然の性と云ふ。故に本然の性は氣質形體の中に存するものを挑出して云ふに過ぎず。氣質の性の外別に本然の性なしと云ふは之れに由るなり。

(第三) 然るに氣質なる現象に就て見れば昏明清濁正偏通塞の別なき能はず。故に人の品類に在りても亦智愚賢不肖善惡美醜の別なき能はざるは自然の理なり。然れば性の本原より云へば朱子の言へるが如く渾然至善未<sub>レ</sub>嘗有<sub>レ</sub>惡ものなりと雖も、その現實よりいへば氣質の昏明清濁正偏通塞は

性に影響して種々の罪惡を生ずるに至るべし。然れども是れ氣質の然らしむる所にして至善の性の然らしむるものにあらず。故に善の根本的先天的なるに反して惡は派生的後天的ならざるべからざるなり。

(乙)氣質の根原。吾人の有する氣質形體なるもの、根原を云へば、宇宙に於ける氣質の吾人に滲へられたるものなれば、吾人の氣質と宇宙の氣質とはもと同一不二にして、只宇宙に於ける氣質は氣質の全體を以て云ひ、吾人に於ける氣質は氣質の部分で云ふの相違あることは、宇宙に於ける理と人生に於ける性との關係に異ならず。而して性が天命によりて吾人に賦與せられたるものなれば、氣質も亦天命によりて吾人に賦與せられたるものにして人爲に由りて然るものにあらざるなり。蓋し纔に理の命あれば氣の命あり、又氣の命あれば亦理の命ありて二者はもと相離るゝものにあらず。故に不雜の看より云へば理の命と氣の命とに分つべしと雖も、不離の看より云へば理の命と氣の命との二者に分つべきものにあらずして此の二者は同一體たるものなり。故に朱子は此の理を説いて、

天道流行。發育萬物。其所以爲造化者。陰陽五行而已。而所謂陰陽五行者。又必有是理。而後有是氣。及其生物。則又必因是氣之聚。而後有是形。故人物之生。必得是理。然後有以爲健順仁義禮智之性。必得是氣。然後有以爲魂魄五臟百骸之身。周子所謂無極

之眞。二五之精。妙合而凝者。正謂是也。(大學或問大全、七頁)

と云ひ、又

人之所<sub>レ</sub>以生。理與<sub>レ</sub>氣合而已。天理固浩々不<sub>レ</sub>窮。然非<sub>レ</sub>是氣。則雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>是理。而無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>湊泊。故二氣交感。凝結生聚。然後是理有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>附着。凡人之能言語動作思慮營爲皆氣也。而理存焉。故發而爲<sub>レ</sub>孝弟忠信仁義禮智<sub>レ</sub>皆理也。(朱子語類卷四、十一頁)

と云へり。此れに據れば理も氣も共に天より賦與せられたるものにして、その賦與せらるゝや同時にして先後あるものにあらざるを知るべし。然るに吾人の形體を組織せる氣質とは如何なるものなるかと云ふに、宇宙には陰陽の二氣ありその變合によりて水火木金土の五行なる質を生じ、而して二氣五行の錯綜變合によりて天地萬物を生ずるものなれば、宇宙間の萬物は一として二氣五行の變合によりてその形體を構成せるにあらざるものなし。所謂必得<sub>レ</sub>是氣。然後有<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>魂魄五臟百骸之身。とは之をいへるなり。是の理は今の科學者が無數の電子の積集によりて無數の原子を成し、無數の原子の積集によりて無數の原質を成し、又無數の原質の積集によりて無數の細胞を成し、更に無數の細胞の積集によりて肉體を成すと云へると、その言に精粗の別あれどもその理は全く同一なり。故に氣質なる語は形體を組織する氣又は質を意味することあり。氣質によりて組成せられたる形體其のものを謂ふことあり。然れども多くの場合には前者を指して氣質と云へり。「氣質之稟。



不能無淺深厚薄之別。」と云ひ、「氣稟偏於剛。則一向剛暴。偏於柔。則一向柔弱。」と云へる氣質又は氣稟は皆此の意味に屬す。而して此の氣質には木の氣質、火の氣質、水の氣質、金土の氣質あること、希臘に於て人の氣質を分つて多血質、膽汁質、粘液質、憂鬱質の四種と爲したると似たる所あり。然るに一人一質のものなく大抵一人にして數質を兼ねるを常とす。その中には木の氣質を稟くること多くして、その他の火土金水の氣質の少きものあり。又火の氣質を稟くること多くしてその他の木土金水の氣稟少きものありて、一人として同一の質量を稟くるものなし。是れ氣質はもと理と異なり差別不平等なるに由るなり。蓋し理の平等無差別にして氣の差別不平等なるは宇宙人生に於ける本來の原則とす。而して氣質の差別不平等なるはその道德性の發現に關係すること少小にあらず。朱子が、

人性雖同。稟氣不能無偏重。有得木氣重者。則惻隱之心常多。而羞惡辭遜是非之心。爲其所塞而不發。有得金氣重者。則羞惡之心常多。而惻隱辭遜是非之心。爲其所塞而不發。水火亦然。唯陰陽合德。五性全備。然後中正而爲聖人也。(朱子語類卷四、二十頁)

天命之性。本未嘗偏。但氣質所稟却有偏處。氣有昏明厚薄之不同。然仁義禮智。亦無闕一之理。但若惻隱多。便流爲姑息柔懦。若羞惡多。便有羞惡其所不當羞惡者。且如言光必有鏡然後有光。必有水然後有光。光便是性。鏡水便是氣質。若無鏡與水。光亦

と云へるは即ち此の理を説けるなり。而して朱子の所謂氣質なるものには純粹なるものあり雜駁なるものあり、光明なるものあり暗黒なるものあり、清濁あり正偏あり通塞ありて一も同一なるものあることなし。その氣質の聚合によりて組成せらるゝ状態は人と物と同じからず、又人と人との間に於ても亦同じからず。是に於て人生界と自然界との間に萬殊の別を生じ、又同一の人生界に在りても知愚賢不肖善惡正邪の相違を生ずるを免れざるなり。

(丙)氣質の本質。氣質の本質は之を分つて二と爲すを得べし。即ち(一)は氣質の組織如何によりて知愚賢不肖の別を生ずること。(二)は善惡正邪の別を生ずること是れなり。

(一)賢愚の別。蓋し吾人の天より賦與せられたる理性に至りては聖凡賢愚の別なく平等一如にして些少の差異あるものにあらず。故にその天性に仁義禮智の徳を具有することも、又惻隱羞惡辭讓是非の情となりて現はるべきものを具ふことも、父子君臣夫婦長幼朋友の倫となりて發現すべき理を有することも、聖凡を問はず賢愚を論せず、すべて同一不二なるものとす。然るに現實に在りては智人あり愚人あり賢人あり不肖者あり、又善人あり惡人あり正人あり邪人ありて一も同じきものなきは何ぞや。朱子の説によれば是れ皆畢竟各人氣質の相異なるに由らずんばあらざるなり。人は物に比ぶれば氣の開通正純なるものを得れども、その開通正純なるものゝ中にも亦幾多の差異あ

りて大いに開通正純なるものあり、少しく開通正純なるものあり一人として同一のものあることなし。故にその氣の清明純粹なるものを得たる人は聖人となり、その天に得たる理性はそのまゝ現はれて一も理に中らざるものなく能く善美を盡すを得べし。然るにその氣の清明純粹なること聖人に及ばざるものは賢人となり、その天に得たる理性の發現亦聖人の如くなる能はずして、修養の工夫を加ふるにあらずんば聖人の域に進むを得べからず。常人に至りてはその稟くる所の氣昏濁にして清明ならず雜駁にして純粹ならず。故に氣の爲めに昏蔽せられて理性の發現亦全からず。その爲す所多くは人道に背き甚だしきは禽獸と擇ぶ所なきものあり。然れども此の如き人も本來理性を具ふること聖賢と全く同一なれば、一旦奮然として修養を加へ氣質を變化すれば、理性の本體に復りて之を實現するを得て能く善美の域に進むを得べし。此れを以て之を觀れば人の天に稟くる理性は本來普遍平等なりと雖も、氣質は萬殊不平等なるを以て人生に於けるすべての差異は氣質に由りて生ずるものと謂はざるべからず。朱子は此の理を説いて、

唯人之生。乃得<sub>二</sub>其氣之正且通者<sub>一</sub>。而其性爲<sub>二</sub>最貴<sub>一</sub>。故其方寸之間。虛靈洞徹。萬理咸備。蓋其所<sub>三</sub>以異<sub>二</sub>於禽獸<sub>一</sub>者。正在<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>。而其所<sub>三</sub>以可<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>堯舜<sub>一</sub>。而能參<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>。以養<sub>二</sub>化育<sub>一</sub>者。亦不<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>焉。是則所<sub>レ</sub>謂明德者也。然其通也。或不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>清濁之異<sub>一</sub>。其正也或不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>美惡之殊<sub>一</sub>。故其所<sub>レ</sub>賦之質。清者智而濁者愚。美者賢而惡者不肖。又不<sub>二</sub>能<sub>レ</sub>同者<sub>一</sub>。必其上智大賢之資。

乃能全<sub>二</sub>其本體<sub>一</sub>。而無<sub>二</sub>少不明<sub>一</sub>。其有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>乎此<sub>一</sub>。則其所<sub>レ</sub>謂明德者。已不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>蔽而失<sub>二</sub>其全<sub>一</sub>矣。況乎又以<sub>二</sub>氣質有<sub>レ</sub>蔽之心<sub>一</sub>。接<sub>二</sub>乎事物無<sub>レ</sub>窮之變<sub>一</sub>。則其目之欲<sub>レ</sub>色。耳之欲<sub>レ</sub>聲。口之欲<sub>レ</sub>味。鼻之欲<sub>レ</sub>臭。四肢之欲<sub>二</sub>安佚<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>以害<sub>二</sub>乎其德<sub>一</sub>者。又豈可<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>言也哉。二者相因。反覆深固。是以此德之明。日益昏昧。而此心之靈。其所<sub>レ</sub>知者。不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>情欲利害之私<sub>一</sub>而已。是則雖<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>人之形<sub>一</sub>。而實何以遠<sub>二</sub>於禽獸<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以爲<sub>二</sub>堯舜<sub>一</sub>。而參<sub>レ</sub>天地<sub>上</sub>。而亦不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>以自充<sub>一</sub>矣。(大學或問大全、九頁十頁)

と云へり。その氣質の清濁美惡によりて智愚賢不肖の別を生ずることは之を社會の事實に徴して知るを得べくして決して動かすべからざる所なり。然るに人の氣稟は之を分てば大略清濁善惡の四種ど爲すを得べしと雖も此の四種に盡くるものにあらず。又人の品類も亦決して智愚賢不肖の四種を以て盡くし得べきものにあらず。故に朱子は氣の複雑にして且人品の一樣ならざるを述べて、

氣稟之殊。其類不<sub>レ</sub>一。非<sub>二</sub>但清濁二字而已<sub>一</sub>。今人有<sub>二</sub>聰明事々曉者<sub>一</sub>。其氣清矣。而所<sub>レ</sub>爲未<sub>二</sub>必皆中<sub>二</sub>於理<sub>一</sub>。則其氣不<sub>レ</sub>醇也。有<sub>二</sub>謹厚忠信者<sub>一</sub>。其氣醇矣。而所<sub>レ</sub>知未<sub>二</sub>必皆達<sub>二</sub>於理<sub>一</sub>。則是其氣不<sub>レ</sub>清也。推<sub>レ</sub>此求<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>見。(朱子語類卷四、二十頁)

問。世間有<sub>二</sub>人聰明通曉<sub>一</sub>。是稟<sub>二</sub>其氣之清<sub>一</sub>者矣。然却所<sub>レ</sub>爲過差。或流而爲<sub>二</sub>小人之歸<sub>一</sub>者<sub>レ</sub>。又有<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>人賢而不<sub>二</sub>甚聰明通曉<sub>一</sub>。是如何。曰。或問中固已言<sub>レ</sub>之。所<sub>レ</sub>謂又有<sub>二</sub>智愚賢不肖之殊<sub>一</sub>。是

也。蓋其所賦之質。便有此四樣。聰明曉事者智也。而或不賢。便是稟賦中欠了清和溫恭之德。又有三人極溫和而不甚曉事。便是賢而不智。爲學便是要下克化教此等氣質令恰好耳。(同上卷十七、六頁)

と云へり。蓋し氣質の多種なる清濁美惡の上に昏明純駁の四字を加ふるも未だ之を盡すに足らず。又人品の多種なる智愚賢不肖の他に善惡邪正の四字を加ふるも是れ亦未だ之を盡すに足らず。故に之を稱して萬殊と云ふの他なかるべし。而して此の千種萬様は皆氣質の然らしむるものにして理に由りて然るにあらず。朱子は又性の氣中に存するを以て寶珠の水中に在るに譬へて、

有是理而後有是氣。有是氣則必有是理。但稟氣之清者。爲聖爲賢。如寶珠在清冷水中。稟氣之濁者。爲愚爲不肖。如珠在濁水中。所謂明明德者。是就濁水中。揩拭此珠也。物亦有是理。又如寶珠落在至汚濁處。然其所稟亦間有些明處。就上面便自不味。如下虎狼之父子。蜂蟻之君臣。豺獺之報本。雖鳩之有別。曰仁獸曰義獸是也。

(同上卷四、十九頁)

性譬之水。本皆清也。以淨器盛之則清。以不淨之器盛之則臭。以汚泥之器盛之則濁。本然之清。未嘗不在。但既臭濁。猝難得便清。故雖愚必明。雖柔必強。也然用力。然後能之。(同上)

と云へり。此れに據れば本性は即ち理なれば純粹至善にして未だ嘗て惡あらずと雖も、もと形體を離れて別に存するものにあらざるを以て、形體を組織せる氣質の爲めに累はさるゝを免れず。其の氣質の清明純美なるものはその中に存する理性能く發現するを得べけれども、氣質の昏濁粗惡なるものはその中に存する理性悉く發現するを得べからず。是に於て人品より云へば知愚賢不肖の差を生ぜざるを得ず。行爲より云へば善惡正邪の別を生ぜざるを得ざるなり。故に社會の人々の相異及び社會の事物の相異は皆吾人の氣質の相異に歸せざるべからず。是れ朱子が、

氣稟所<sub>レ</sub>拘。只通<sub>二</sub>一路<sub>一</sub>極多樣。或厚<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>。而薄<sub>二</sub>于彼<sub>一</sub>。或通<sub>二</sub>于彼<sub>一</sub>。而塞<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>。有<sub>下</sub>人能盡通<sub>二</sub>天下利害<sub>一</sub>。而不<sub>レ</sub>識<sub>二</sub>義理<sub>一</sub>。或工<sub>二</sub>于百工技藝<sub>一</sub>。而不<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>讀書<sub>一</sub>。或知<sub>レ</sub>孝<sub>二</sub>于親<sub>一</sub>。而薄<sub>二</sub>于他人<sub>上</sub>。如<sub>下</sub>明皇友<sub>二</sub>愛諸弟<sub>一</sub>。長枕大被終身不<sub>レ</sub>變。然而爲<sub>レ</sub>君則殺<sub>二</sub>其臣<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>君則殺<sub>二</sub>其子<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>夫則殺<sub>二</sub>其妻<sub>一</sub>。便是有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>通有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>蔽。是他性中只通<sub>二</sub>得一路<sub>一</sub>。故于<sub>二</sub>他處<sub>一</sub>皆碍也。是氣稟也。是利害昏了。(同上、二十一頁)

以<sub>二</sub>人品賢愚清濁<sub>一</sub>論。有<sub>二</sub>合下發得善底<sub>一</sub>。也有<sub>二</sub>合下發得不善底<sub>一</sub>。也有<sub>下</sub>發得善而爲<sub>二</sub>物欲所<sub>レ</sub>奪。流入<sub>二</sub>於不善<sub>一</sub>底。極多<sub>二</sub>般樣<sub>一</sub>。今有<sub>二</sub>一様人<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>事在<sub>二</sub>這裡坐<sub>一</sub>。他心裡也只思量要<sub>レ</sub>做<sub>二</sub>不好事<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>蛇虺<sub>一</sub>相似。只欲<sub>レ</sub>咬<sub>レ</sub>人。只有<sub>二</sub>甚麼發得善<sub>一</sub>。明道說<sub>レ</sub>水處最好。皆水也。有<sub>二</sub>流而至<sub>レ</sub>海終無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>汚。有<sub>二</sub>流而未<sub>レ</sub>遠固已漸濁<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>流而甚遠方有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>濁。有<sub>二</sub>濁之多者濁之少者<sub>一</sub>。只可<sub>二</sub>

如レ此說。(同上、二十頁)

と云へる所以なり。

(二)善惡の別。

蓋し氣質の清濁美惡昏明純駁は獨り智慧賢不肖の別を生ずるのみにあらず。智なるもの賢なるものは多くは善を爲せども愚なるものは多くは惡を爲すを免れず。是に於て善惡正邪の根原を以て氣質に歸せざるを得ず。氣質それ自體はもと宇宙に於ける氣質に稟けたるものにして惡なるものと謂ふべからず。但氣質に清濁昏明美惡純駁の同じからざるあるを以てその作用に節に中るものと節に中らざるものとの相異を生じ、節に中るものは善なれども節に中らざるものは惡となるべし。是れ人生社會に種々の罪惡を生ずる所以の根原となるなり。朱子の言に、

問。天地之性既善。則氣稟之性如何不善。曰理固無不善。才賦于氣質。便有清濁偏正剛柔緩急之不同。蓋氣雖是理之所生。然既生出。則氣強而理弱。理管攝他不得。如這理寓于氣了。日用間運用都由這箇氣。如父子本是一氣。子乃父所生。父賢而子不肖。父也管他不得。又如君臣。同心一體。臣乃君所命。上欲行而下沮格。上之人亦不能一々去督責得他。(同上十一頁)

問。善固性也。然惡亦不可不謂之性也。看來此理本善。因氣而鶻突。雖是鶻突。然亦是性也。曰。它原頭處都是善。因氣偏這性便偏了。然此處亦是性。如下人渾身都是惻隱。而

無<sub>レ</sub>羞惡。都羞惡而無<sub>レ</sub>惻隱<sub>上</sub>。這箇便是惡德。這箇喚<sub>レ</sub>做性邪不<sub>レ</sub>是。如<sub>レ</sub>墨子之心。本是惻隱。孟子推<sub>レ</sub>其弊。到<sub>レ</sub>得無<sub>レ</sub>父處。這箇便要亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>之性<sub>二</sub>也。(同上、十八頁)

と云へるもの即ち是れなり。此れに由りて之を觀れば惡はもと氣質の昏濁偏塞不純不粹なるより起るものにして、氣質の昏濁偏塞不純不粹なるものはその活動に過不及を生ずるを免れず。而して此の活動の過不及即ち惡なりと謂はざるべからず。蓋し氣はもと理の生ずる所なれども既に生じたる後氣の力強くして理弱きときは理はその氣を主宰するを得ずして活動に過不及を生ずるを免れず。是れ惡の生ずる所以にして性によりて然るにあらざるなり。故に朱子は又

所<sub>レ</sub>稟之氣。所<sub>レ</sub>以必有<sub>レ</sub>善惡之殊<sub>二</sub>者。亦性之理也。蓋氣之流行。性爲<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>主。以<sub>レ</sub>其氣之或純或駁。而善惡分焉。故非<sub>下</sub>性中本有<sub>二</sub>一物<sub>一</sub>相對<sub>上</sub>也。然氣之惡者。其性亦無<sub>レ</sub>不善。故惡亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>之性<sub>二</sub>也。先生(明道)又曰。善惡皆天理。謂<sub>レ</sub>之惡<sub>二</sub>者本非<sub>レ</sub>惡。但或過或不<sub>レ</sub>及便如<sub>レ</sub>

此。蓋天下無<sub>レ</sub>性外之物。本皆善而流<sub>レ</sub>於惡<sub>一</sub>耳。(朱子文集卷六十七、十八頁)

と云へり。此の説はもと程明道の説に據りたるものにして、惡はもと氣質による活動の過不及によりて生ずること明道の云へるが如し。而して氣質による活動に過不及を生ずるは理の主宰する所足らざるに由るものなれば惡も亦性と謂はざるべからずと云へるのみ。吾人の罪惡がすべて性(即理)より生ずると謂ふにあらざる也。故に朱子に亦「人雖<sub>下</sub>爲<sub>レ</sub>氣所<sub>レ</sub>昏。而流<sub>レ</sub>於不善。而性未<sub>レ</sub>嘗不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>



其中。特謂<sub>二</sub>之性。則非<sub>三</sub>其本然。謂<sub>三</sub>之非<sub>レ</sub>性。則初不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>是。以<sub>三</sub>其如<sub>レ</sub>此。故不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以不<sub>レ</sub>加<sub>三</sub>澄治之功。惟能學以勝<sub>レ</sub>氣。則知<sub>下</sub>此性渾然初未<sub>二</sub>管壞。所謂元初水<sub>上</sub>也。〔同上〕の言あり。此の如く惡は吾人の氣質の昏濁偏塞によりて起るものとすれば吾人は學んで以てその氣質を變化して澄治の功を加へその性の善を發現することを努めざるべからず。蓋し氣質なるものはもと先天的固有のものなれば之を變化するは頗る困難なりと雖も、理も亦先天的固有にして氣を主宰するものなれば能く本性に復るを得べし。朱子が、

凡人之能言語動作思慮營爲皆氣也。而理存焉。故發而爲<sub>二</sub>孝弟忠信仁義禮智。皆是理也。然就<sub>二</sub>人之所<sub>レ</sub>稟而言。又有<sub>二</sub>昏明清濁之異。故上智生知之資。是氣清明純粹。而無<sub>二</sub>一毫昏濁。所以生知安行。不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>學而能。如<sub>二</sub>堯舜。是也。其次則亞<sub>二</sub>於生知。必學而後知。必行而後至。又其次資稟既偏。又有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>蔽。須<sub>三</sub>是痛加<sub>二</sub>工夫。人一己百。人十己千。然後方能及<sub>下</sub>亞<sub>二</sub>於生知<sub>上</sub>者。及<sub>二</sub>進而不<sub>レ</sub>已則成<sub>レ</sub>功一也。〔朱子語類卷四、十二頁〕

と云へるは此の理を説けるなり。蓋し吾人の天に稟くる所の理は聖凡を問はず同一なれども、その天に稟くる所の氣に至りては聖凡によりて同一にあらず。是れ生知の聖人あり學知の賢人あり困知の常人あり困んで學はざるの愚人ある所以なり。然るにその稟くる所の理は皆同一なるを以て、修爲の工夫を加ふれば何人も聖人の域に進むを得ざるの理なし。たとひ氣質の清明純粹ならざるが爲

めに聖人の境に進むを得ずとするも、賢人の境に進むを得ざることなかるべし。故に張横渠は「氣質之性。君子有<sub>二</sub>弗<sub>レ</sub>性者<sub>一</sub>焉。學以反<sub>レ</sub>之。則天地之性存焉。」と云へり。蓋し氣質は有生の初受くる所のものなれば昏濁なるもの遽に清明ならしむべからず雜駁なるもの遽に純粹ならしむべからずと雖も、その修爲の如何によりてはその量を變化せしむることを得べからざるにあらざるべし。故に朱子は、

天之生<sub>二</sub>此人<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>朝廷之命<sub>二</sub>此官<sub>一</sub>。人之有<sub>二</sub>此性<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>官之有<sub>二</sub>此職<sub>一</sub>。朝廷所<sub>レ</sub>命之職。無<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>之行<sub>レ</sub>法治<sub>レ</sub>民<sub>一</sub>。豈有<sub>二</sub>不善<sub>一</sub>。天之生<sub>二</sub>此人<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>仁義禮智之理<sub>一</sub>。亦何嘗有<sub>二</sub>不善<sub>一</sub>。但欲<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>此物<sub>一</sub>。必須<sub>二</sub>有<sub>レ</sub>氣然此物有<sub>二</sub>以聚而成<sub>レ</sub>質<sub>一</sub>。而氣之爲<sub>レ</sub>物。有<sub>二</sub>清濁昏明之不同<sub>一</sub>。稟<sub>二</sub>其清明之氣<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>物欲之累<sub>一</sub>。則爲<sub>レ</sub>聖。稟<sub>二</sub>其清明<sub>一</sub>。而未<sub>二</sub>純全<sub>一</sub>。則未<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>微有<sub>二</sub>物欲之累<sub>一</sub>。而能克<sub>二</sub>去之<sub>一</sub>。則爲<sub>レ</sub>賢。稟<sub>二</sub>其昏濁之氣<sub>一</sub>。又爲<sub>二</sub>物欲之所蔽<sub>一</sub>。而不能<sub>レ</sub>去。則爲<sub>レ</sub>愚爲<sub>二</sub>不肖<sub>一</sub>。是皆氣稟物欲之所<sub>レ</sub>爲。而性之善。未<sub>二</sub>嘗不<sub>レ</sub>同也。堯舜之生。所<sub>レ</sub>受之性亦如<sub>二</sub>是耳<sub>一</sub>。但以<sub>二</sub>其氣稟明白無<sub>二</sub>物欲之蔽<sub>一</sub>。故爲<sub>二</sub>堯舜<sub>一</sub>。初非<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>增<sub>二</sub>益於性分之外<sub>一</sub>也。故學者知<sub>二</sub>性善<sub>一</sub>。則知<sub>二</sub>堯舜之聖非<sub>二</sub>是強爲<sub>一</sub>。識<sub>二</sub>得堯舜所<sub>レ</sub>做處<sub>一</sub>。則便識<sub>二</sub>得性善底規模樣子<sub>一</sub>。而凡吾日用之間。所<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>人欲<sub>一</sub>。復<sub>二</sub>天理<sub>一</sub>。皆吾分内當然之事。其勢<sub>二</sub>至順而無<sub>レ</sub>難<sub>一</sub>。(朱子文集卷七十四、二十一頁)

と云へり。之を要するに吾人の氣質に昏明清濁美惡純駁の相異なるを以て知愚賢不肖の別を生せざら

る能はず。而して氣質の清濁純美なるものはその裡に存する理の發現順利なるを以てその爲す所皆正善なれども、氣質の昏濁雜駁なるものはその理の發現氣に沮遏せられて、その爲す所邪惡となるに至るべし。是れ朱子の氣質に關する學說の概要にして、人生社會の現實より云へば人生の差別不平等なる人生の罪惡の存する、皆氣質に本づくものと云はざるを得ざること眞に朱子の謂へる所の如し。然れども更に人生社會の本體より云へば人性は平等無差別にして絶對至善なるものと謂はざるべからざるものあり。朱子は如何にして此の矛盾を解決せんとしたるか。是れ朱子哲學に於て最も重要な問題に屬す。

(丁) 性氣の關係

朱子は宇宙に於ける理と氣質との關係を説明するに不離看不離看の二方面よりして理と氣との二にして一、一にして二なることを明かにしたるは前に述ぶるが如し。而して人生に於ける性と氣質との關係を説明するにも亦同じく不離看不離看の二方面より之を爲せり。蓋し人生に於ける性は宇宙に於ける理の如く、又人生に於ける氣質は宇宙に於ける氣質の如くにして、不離看より見れば吾人の性と氣質とは本來相離るべからざる關係を有し、氣質を離れて性なく性を離れて氣質なしと云はざるべからず。而して不離看より見れば性は性にして氣質にあらず、氣質は氣質にして性にあらず二者各別のものなりと謂ふを得べし。故に性と氣質との二者の關係は宇宙に於ける理氣の關係と同じく二にして一、一にして二と謂ふべきものなり。

(一)不雜觀。今不雜看に就て之を考察するに性と氣質とはも同一體の存在にして分離すべからざるものなれども、氣質を雜へずして只性のみを抽象して考ふるときは、之を分つて性と氣質との二個の存在として見ることを得べし。此の點より見れば性者人所下稟於天、以生上之理にして吾人の形體を組成する氣質そのものと異なり。又氣質は吾人が天に得てその形體を組成する所以の器にして吾人の本體たる本然の性そのものにあらず。故に朱子の所謂理與氣。此決是二物。の論は此の性理論に於ても猶眞理たるを失はず。故に朱子が宇宙論に於て、「○此所謂無極而太極也。所以動而陽靜而陰之本體也。然非有以離乎陰陽也。即陰陽而指其本體不雜乎陰陽。而爲言耳」。(太極圖解)と云へるが如く、本然の性は吾人人生の本體にして氣質を離れて存するものにあらずれども、氣質に就てその本體の氣質に雜らざるものを挑出して云へることなれば、是は一の抽象論にして現實性を云ふものにあらずと云はざるべからず。故に朱子此の意を説いて以爲らく、

性也只是一般。天之所命。何嘗有異。正緣氣質不同。便有不相似處。故孔子謂之相近。孟子恐人謂性元來不相似。遂於氣質內挑出天之所令者。說與人。道性無有不善。即子思所謂天命之謂性也。(朱子全書卷四十三、五頁)

蓋し吾人の現實に就て云へば只氣質の性の一あるのみにして、氣質の性の外に本然の性あるべきの理なし。何となれば現實より見れば性は氣質の中に存在するものにして本然の性のみ懸空に氣質に

着かずして自ら一物として存すべきの理なければなり。然れども氣質の中に就てその氣質に雜らざるものを挑出して云へば本然の性ありと謂ふを得べし。是れ朱子が於氣質内。挑出天所命者。說與人。と云へる所以なり。余が此の論を以て一の抽象論なりと云へるも亦是れが爲めに外ならず。然れども此れを以て空理空想なりとは謂ふべからず。何となれば本然の性は本來空無のものなりと謂ふにあらざして、現象の中に實在して人生の根本原理として人生一切行動の主宰たるものなればなり。但本然の性の何物たるを知るには殊に氣質より引離して之を明かにするを要するのみ。是れ朱子に不雜看の説ある所以なり。朱子は更に之を反覆して、

氣質是陰陽五行所爲。性卽太極之全體。但論氣質之性。則此全體墮在氣質之中耳。非別有性也。人生而靜。是未發時。以上卽是人物未生之時。不可謂性。才謂之性。便是人生以後。此理墮在氣質之中。不全是性之本體矣。然其本體。又未嘗外此。要人卽此而見得其不雜於此者。易大傳言繼善。是指未生之前。孟子言性善。是指已生之後。雖曰已生。然其本體初不相雜也。(朱子文集卷六十一、二十四頁)

所謂天命之謂性者。是就人身中。指出這箇是天命之性。不雜氣質者而言爾。若才說性時。則便是夾氣質而言。所以說時便已不是性也。(朱子全書卷四十三、十七頁)

と云へり。而して朱子に據れば子思の所謂天命之性も易に所謂成之者性も孟子の所謂性善も、皆

氣稟の性に就て氣質を雜へずしてその本體の性を指して云へるものに外ならざること、上文に引ける所を見て之を知るを得べし。不雜看の上より見れば此の如く性と氣質とを分つて二と爲すを得べけれども、不離看の上より見れば氣質の性の外に本然の性なきを見るを得べし。

(二)不離看。氣質の性なる語は即ち不離看の上より云へるものにして、前の定義に於て述べたるが如く吾人の氣質形體の中に存する本然の性を意味したるものなり。蓋し吾人の現實より見れば所謂性(本然の性)は氣質形體を超越して存在するものにあらずして、全く吾人の氣質形體の生理作用に伴ふものに外ならざれば、現實界に在りては氣質の性の一あるのみ。氣質の性を外にして別に本然の性あるにあらず。所謂本然の性は氣質の性の性のみを挑出して抽象的に云へるに過ぎず。故に宇宙に於ける理と氣とを分別すれば分別し得られざるにあらざれども、現實より見れば理氣一體にして何れよりを理とし何れよりを氣とするを得べからざるが如きものと見ざるべからず。朱子又性と氣質との關係を説いて以爲らく、

性只是仁義禮智。所謂天命之與氣質。亦相滾同。才有天命。便有氣質。不能相離。若闕  
レ一便生物不得。既有天命。須是有此氣。方能承當得此理。若無此氣。則此理如何頓  
放。(朱子語類卷四、十頁)

問氣質之性。曰。纔說性時。便有些氣質在裡。若無氣質。則這性亦無安頓處。所以

繼<sub>レ</sub>之者。只說<sub>二</sub>得善<sub>一</sub>。到<sub>二</sub>成<sub>レ</sub>之者<sub>一</sub>便是性。(同上、十二頁)

天命之性。若無<sub>二</sub>氣質<sub>一</sub>。却無<sub>二</sub>安頓處<sub>一</sub>。且如<sub>二</sub>一勺水<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>物盛<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。則水無<sub>二</sub>歸着<sub>一</sub>。程子云。

論<sub>レ</sub>理不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>氣不<sub>レ</sub>備。論<sub>レ</sub>氣不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>性不<sub>レ</sub>明。二<sub>レ</sub>之則不<sub>レ</sub>是。所<sub>レ</sub>以發<sub>二</sub>明千古聖賢未<sub>レ</sub>盡之意<sub>一</sub>。

甚爲<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>功。(同上、十二頁)

此れに據れば本然の性と氣質とはもと相離るゝを得べからずして、氣質あれば必ず性あり性あれば必ず氣質あり。氣質なきの性性なきの氣質の如きは夢想するを得べからず。是れ猶宇宙に於ける理と氣とのもと相離るべからざるが如し。故に現實界より見れば氣質の性の一性あるのみにして氣質の性の外別に本然の性ありと云ふべからず。朱子更に此の理を説いて以爲らく、

大抵人有<sub>二</sub>此形氣<sub>一</sub>。則是此理始具<sub>二</sub>於形氣之中<sub>一</sub>。而謂<sub>二</sub>之性<sub>一</sub>。纔是説<sub>レ</sub>性。便已涉<sub>二</sub>乎有生<sub>一</sub>。而兼<sub>二</sub>乎氣質<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>性之本體<sub>一</sub>也。然性之本體。亦未<sub>二</sub>嘗雜<sub>一</sub>。要人就<sub>二</sub>此上面<sub>一</sub>。見<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其本體<sub>一</sub>。元未<sub>二</sub>嘗離<sub>一</sub>。亦未<sub>二</sub>嘗雜<sub>一</sub>耳。(朱子全書卷四十三、十五頁)

蓋し吾人の生れ来るや必ず氣質形體を有す。既に氣質形體を有すれば同時にその性を稟け來りて性と氣質形體とは同在俱存して先後の次第あるものにあらず。是れ現實より云へば性と氣との分離すべからざる所以にして、余の現實より見れば氣質の性の一あるのみ氣質の性を外にして本然の性あることなしと云へるは是れが爲めなり。然るに此の氣質の中に存する本然の性なるものは、人生一

切の根本原理にして之を外にして吾人を主宰すべきものもあることなし。故に吾人は常に性の聲に聞き性の命ずる所に従はざるべからず。他の學派の徒に在りては朱子が本然の性と氣質の性とを分別して説けるを見て、朱子は本然の性と氣質の性と二性の存在を認めたりと云ふものあり。明の高中玄(名は拱)の如きも此の説を爲せる一人にして其の説に以爲らく、

氣即是理。理即是氣。不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>以相離<sub>一</sub>也。而宋儒乃分而<sub>二</sub>之<sub>一</sub>。曰有<sub>二</sub>氣質之性<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>義理之性<sub>一</sub>。夫性一而已。將何者爲<sub>二</sub>氣質之性<sub>一</sub>。又將何者爲<sub>二</sub>義理之性<sub>一</sub>乎。且氣質之性。謂<sub>下</sub>其雜<sub>二</sub>於形氣<sub>一</sub>者也。義理之性。謂<sub>下</sub>其不<sub>レ</sub>雜<sub>二</sub>於形氣<sub>一</sub>者也。然氣質之性。固在<sub>二</sub>於形氣中<sub>一</sub>矣。而義理之性。乃不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>形氣中<sub>一</sub>乎。不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>形氣之中<sub>一</sub>。則將何所<sub>二</sub>住着<sub>一</sub>乎。蓋天之生<sub>レ</sub>人也。賦<sub>二</sub>之<sub>一</sub>性。而宋儒以爲<sub>二</sub>一性<sub>一</sub>。則吾不<sub>二</sub>敢知<sub>一</sub>也。(四書知新目錄孟下六、百五十三頁)

高中玄が朱子の氣質の性と本然の性とに分つて説けるを見て遂に性を分つて二と爲せりと云ふは、朱子の説の本旨を知らざること甚しと謂はざるべからず。朱子の所謂氣質の性とは前にも述べたるが如く、吾人の氣質形體の中に存する本然の性を意味したるものにして、現實の上より見れば、性(即本然の性)は氣質形體と共に存在するものなり。故に性と云へば氣質を離れず氣質と云へば性を離れず。是れ氣質の性と云へる所以にして氣質の性の外別に本然の性の存すべき理由なきこと明かなり。然るに此は不離看の上より見たるものにして、不離看より之を見れば此れに異なり、氣質と



性との不離なるもの、中より特に本然の性のみを抽象していへば姑く氣質よりその性のみを引離して見ることを得ざるにあらず。然れども氣質より引離したる義理の性が別に存在せりと言ふにあらず。此は唯吾人の觀念上に於ける問題に屬し事實上の問題にあらず。高中玄云ふ氣質之性。固在<sub>二</sub>於形氣中<sub>一</sub>矣。而義理之性。乃不在<sub>二</sub>形氣中<sub>一</sub>乎。と此れ不離より云へるものなれば何人も之を否定するものあらざるべく、朱子も不離看の上よりは義理の性の形氣中に墮在することを説けるにあらずや。然るに高中玄が不在<sub>二</sub>形氣之中<sub>一</sub>。則將何所<sub>二</sub>住着<sub>一</sub>乎と云ふに至りてはその不離看の意味を解せざるものと謂はざるを得ざるなり。朱子は未だ嘗て本然の性の形氣以外に存在するを説きたることあらず。唯姑く吾人の觀念の上に於て氣質より分別して考察したるのみ。朱子の所謂不離不離の看の意味を解するものにおいて之を解理するに於て何等の困難あることなし。然るに羅整菴の之を解すること能はざりしは前に述ぶる所の如く、而して高中玄も亦之を解すること能はずして却て朱子の説を非とすること亦此の如きものあり。惟ふに明代の學者多くは不離の意味を知りて不離の意味を理解すること能はざりしなり。吳蘇原の如きも亦不離の意味を理解すること能はざりし人なり。その著吉齋漫錄に曰く、

問何以有<sub>二</sub>氣質之性<sub>一</sub>。天地之性。曰。孔子無<sub>二</sub>是說<sub>一</sub>也。蓋性卽是氣。性之名生<sub>二</sub>於人之有生<sub>一</sub>。人之未<sub>レ</sub>生。性不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>名。既名爲<sub>レ</sub>性。卽已是氣。又焉有<sub>二</sub>氣質之名<sub>一</sub>乎。既無<sub>二</sub>氣質之性<sub>一</sub>。又焉有<sub>二</sub>

天地之性一乎。蓋緣下孟子言性善。夫子言相近。求之不<sub>レ</sub>得。故以善爲天地之性。相近爲氣質之性。以要其同。而不<sub>レ</sub>知其反異也。性一而已。而有二乎。曰然則何以明性之爲氣質也。曰孟子曰。口之於<sub>レ</sub>味也。目之於<sub>レ</sub>色也。耳之於<sub>レ</sub>聲也。鼻之於<sub>レ</sub>臭也。四肢之於<sub>レ</sub>安佚也。性也。有<sub>レ</sub>命焉。君子不<sub>レ</sub>謂性也。又曰。仁之於<sub>レ</sub>父子也。義之於<sub>レ</sub>君臣也。禮之於<sub>レ</sub>賓主也。知之於<sub>レ</sub>賢者也。聖人之於<sub>レ</sub>天道也。命也。有<sub>レ</sub>性焉。君子不<sub>レ</sub>謂命也。由<sub>レ</sub>此言<sub>レ</sub>之。耳目之類。雖曰<sub>レ</sub>氣質。而皆天地所<sub>レ</sub>生。仁義之類。雖曰<sub>レ</sub>天命。而氣質所<sub>レ</sub>成。若曰仁義之類。不<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>氣質。則耳目之類。不<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>天地。有<sub>レ</sub>此理一乎。故凡言<sub>レ</sub>性也者。卽是氣質。說<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>氣質之性。則性有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>是氣質<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>乎。(吉齋漫錄卷上三十六頁)

吳蘇原の説く所に據れば性は生理的心作用と云ふべきものにして吾人の氣質卽性なれば氣質以外に性の認むべきものあるなし。但その生理的心作用中専ら道義に發するものと生理に發するものとの別を認めたるものあり。故にその言に「性之本雖<sub>レ</sub>善。而氣之所<sub>レ</sub>爲。則亦有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>善者。其發雖<sub>レ</sub>善。而流之所<sub>レ</sub>弊。則亦有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>善者。」(同上)の言あり。故に現實に於ける性を説けるに於ては朱子と異ならずと雖も、氣質の中に存する本然の性あるを理解すること能はずして、朱子が二性の存在を認めたるものとするに至りてはその誤高中玄と異なる所なし。然るに朱子が不雜看より特に本然の性を抽象して説けるものは、此れに由りて性が人生の根本原理にして純粹至善なることを明かにし、且

人生一切の行動の由りて本づく所の根原を示さんとするの意に外ならず。而して不離看によりて本然の性の氣質形體を離れざるを説けるは、此れ氣質に清濁美惡昏明純駁の相異なるによりて人に智愚賢不肖善惡邪正の生ずることを明かにせんとするの意に出づ。その議論精密正確にして一點の罅漏あるなし。然るに後世紛紜の議論あるは何ぞや。

以上述ぶる所に據れば現實より云へば獨り氣質の性の一あるのみにして二三あるにあらざること明かなりと雖も、その氣質を主宰するものは氣質の中に存する性あるのみ。而して性は體にして主宰する統一原理なれども氣質は用にして主宰せらるゝ現象なれば、朱子の論は本然の性を主とするものにして氣質を主とするものにあらず。且吾人が惡を爲すことあるは氣質の爲めに本性の發現を沮礙せらるゝによるものなれば、氣質の沮礙するものを澄治して性の本體に復ることを圖らざるべからず。是れ朱子が氣質の性に就て殊に本然の性を以て主とすべきを説ける所以なり。周濂溪、程明道の二子は孔子と同じく性を説くこと渾然にして、未だ本然の性と氣質の性と分ちて説きたることなしと雖も、その主とする所の何れに在るかを問はゞ理性を主として之を統一するに在りて、氣質の爲めに性の沮礙せらるゝがまゝに委するものにあらずと謂はざるべからず。故に周濂溪、程明道は所謂氣質の性を説き、程伊川、張橫渠、及び朱子は氣質の性と本然の性とに分つて説けりとは云ふべけれども、此れを以て周濂溪、程明道は氣質の性を主とし、程伊川、張橫渠及び朱子は本然

の性を主として性の淵源に重きたりとは謂ふべからざるなり。

### 第十七節 天命の理

支那には古來天命に關する思想ありて聖賢君子と稱せらるゝ人と雖も大抵之を信せざるものなし。古代の事は姑く之を措き孔子の如きも之を信せられ「五十而知天命」と云ひ。又その門人伯牛の疾あるや之を問ひ牖より其の手を執りて「亡之。命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也。」と云ひ、而して公伯寮の子路を季孫に愬ふるや、又「道之將行也與命也。道之將廢也與命也。公伯寮其如命何。」と云へるが如き以て之を見るべく、孟子も亦天命を信すこと亦孔子に異ならずして「夭壽不貳。修身以俟之。所以立命也。」と云ひ、又「莫非命也。順受其正。是故知命者。不立乎巖牆之下。盡其道而死者正命也。桎梏死者。非正命也。」と云ひ、「行或使之。止或尼之。行止非人所能也。吾之不遇魯侯天也。」と云へるが如き亦皆然るにあらざるなし。朱子亦古來の思想を繼承して天命を信じその理を説けること少からず。朱子は宇宙の實在を哲學的に考察しては之を稱して太極と云へること前に述ぶる所の如し。然るに太極なる理を宗教的に考察しては之を稱して天と云へり。故に太極と天とは同一の實在を指すものなれども、その考察の方面の異なるによりてその名を異にするに過ぎず。而して朱子は天命を説くに當りては大抵宗教的信念の上より之を述ぶること多きが如し。今朱子の天に關する思想を檢するに朱子は天に三

種の意味ありとなせり。(一)形體的天。(二)主宰的天。(三)理體的天是れなり。形體的天は今より云へば自然科学的見地より見たるもの、主宰的天は宗教的信念の上より見たるものにして、理體的天は哲學的考察の上より見たるものなり。而して天命を論ずるに當りては第二の主宰的宗教的の意味を以て云へること多し。その言に、

間問ニ經傳中天字。曰。要ニ人自看得分曉。也有下說ニ蒼々者。也有下說ニ主宰者。也有單訓理者。(朱子語類卷一、五頁)

と云へるは即ち是れなり。而して天命にも二種の意味あり。(一)は理の命にして、(二)は氣の命を云ふ。理の命は太極なる理の人物に賦與せらるゝを云ひ、氣質の命は宇宙の陰陽五行の氣質の人に賦與せらるゝものを云ふ。故に天命は之を分てば此の如く二箇と爲すを得べしと雖も、理氣は本來分離すべからざるものなれば、理の命は必ず氣の命を離れず、氣の命は必ず理の命を離れず現實より見れば理の命と氣の命とは同一體の存在にして分離し得べきものにあらず。朱子の言に、

命只是一箇命。有ニ以理言者。有ニ以氣言者。天之所ニ以賦ニ與人ニ者是理也。人之所ニ以壽夭窮通ニ者是氣也。(同上卷三十六、二頁)

命謂ニ天之付與。所ニ謂天令之謂ニ命也。然命有ニ兩般。有ニ以氣言者。有ニ以理言者。厚薄清濁之稟不ニ同也。如ニ所ニ謂道之將ニ行將ニ廢命也。得ニ之不ニ得曰ニ有ニ命是也。有ニ以理言者。天道流行。付而在

人。則爲仁義禮智之性。如下所謂五十而知天命。天命之謂性。是也。二者皆天所付與。故皆曰命。(同上卷六十一、六頁)

とあるは即ち此の理を説けるものなり。然るに天より吾人にその理を賦與せられ吾人が之を稟けて性となるや、一の主宰者ありて吾人に命令するものゝ如く感せずんばあらず。蓋し宇宙に存する太極なる理體も之を宗教的信念の上より見るときは吾人を支配する一種の全知全能の神の存在するが如く信せらるゝを以てなり。故に朱子語類には、

問。天命只是二氣錯綜參差。隨其所值。因各不齊。皆非人力所與。故謂之天所命否。

曰。只是從大原中流出來。模樣似恁地。不<sub>下</sub>是真有爲之賦與者<sub>上</sub>。那得箇人在<sub>上</sub>上面一分付這箇<sub>上</sub>。詩書所<sub>レ</sub>說。便似<sub>下</sub>有箇人在<sub>上</sub>恁地<sub>上</sub>。如<sub>レ</sub>帝乃震怒之類。然這箇亦只是理如<sub>レ</sub>此。天下莫<sub>レ</sub>尊<sub>上</sub>於理。故以<sub>レ</sub>帝名<sub>レ</sub>之。惟皇上帝降<sub>レ</sub>衷<sub>上</sub>于下民。降便有<sub>レ</sub>主宰意。(同上卷四、八頁)

と云へり。蓋し理より見れば太極はもと宇宙萬化の根原にしてその理の人物に賦與せられたるもの即ち性なれば他に主宰的神ありて然らしむるにあらず。然るに宗教的信念の上より云へば宇宙には吾人以上の主宰的神靈ありて吾人に命令して然らしむるが如く感ずべし。是れ所謂天命にして哲學的に考察すると宗教的に信ずるとの相異あれども其の歸する所は一なりと謂ふべし。

(一) 理の命。今更に理の命に就て考察するに之を分つて二と爲すを得べし。即ち(一)は天道の流

行して萬物に賦與するを意味し、(二)は人の稟受して其の性と爲すを意味するもの是れなり。かの孔子の所謂五十而知天命は第一の意味に屬す。故に朱子之を説明して、天命即天道之流行。而賦於物者。乃事物所以當然之故也。と云へり。而して子思の所謂天命之謂性の如きは第二の意味を主とす。故に朱子は之を説明して天命之謂性。言天之所以命乎人者。是則人之所<sub>中</sub>以爲性也。と云へり。蓋し天に在りては之を命と云ひ、人に在りては之を性と云ふ。是れ天に在ると人に在るとによりてその名を異にするのみにして其の實は同一なり。故に朱子は此の理を説いて、

伊川言天所<sub>レ</sub>賦爲<sub>レ</sub>命。物所<sub>レ</sub>受爲<sub>レ</sub>性。理一也。自<sub>三</sub>天之所<sub>レ</sub>賦<sub>三</sub>與萬物<sub>一</sub>言<sub>レ</sub>之。故謂<sub>三</sub>之命<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>人物所<sub>レ</sub>稟受於天<sub>一</sub>言<sub>レ</sub>之。故謂<sub>三</sub>之性<sub>一</sub>。其實所<sub>三</sub>從言<sub>一</sub>之地頭不<sub>レ</sub>同耳。(朱子全書卷四十二、二頁)

天生<sub>三</sub>蒸民<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>物有<sub>レ</sub>則。只生<sub>三</sub>此民<sub>一</sub>時。便已是命<sub>レ</sub>他以<sub>三</sub>此性<sub>一</sub>了。性只是理。以<sub>三</sub>其在<sub>レ</sub>人所<sub>レ</sub>稟。故謂<sub>三</sub>之性<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>有<sub>下</sub>塊然一物。可<sub>三</sub>命爲<sub>レ</sub>性。而不生不滅<sub>上</sub>也。故伊川先生言。天所<sub>レ</sub>賦爲<sub>レ</sub>命。所<sub>レ</sub>受爲<sub>レ</sub>性。其理甚明。故凡古聖賢說<sub>三</sub>性命<sub>一</sub>。皆是就<sub>三</sub>實事上<sub>一</sub>說。(朱子文集卷五十九、三十頁)

と云ひ、更に譬を以て此の理を述べて天は便ち天子に似て、命は天子が誥勅を以て自家に付與して職事を命するに似、性は自家職事を受けて其の事を掌るに似たるものありと爲せり。故に此の命なるものは天と吾人との中間の關係にして天は體命は用なり。而して此の命によりて吾人に與へられたるものは即ち性なり。故に朱子の言に「理者天之體。命者理之用。性是人之所<sub>レ</sub>受」と言へり。蓋

し天とは其の自然のものに就て之を云ひ、命とは天道の流行して人物に賦與するものに就て之を言ひ、性とは其の理の全體にして人物の受けて以て生を爲すものに就て之を言へるものにして、天は即ち理なり、命は即ち性なり、性は即ち理なりと見るを得べし。之を要するに吾人の先天的固有する本然の性なるものもと天の命令によりて吾人に賦與せられたるものにして人爲によりて然るものにあらず。故に天命と性とはも同一體のものにして只天に在りては之を命と云ひ人に在りては之を性と云ふの相異なるのみ。而して天の性を人に賦與するや空しく賦與するに非ず。必ず氣質形體と共に之を賦與するを以て性の在る所必ず氣質あり氣質の在る所必ず性あり。性は氣質を離れず氣質は性を離れず之を氣質の性と謂ふ。かくの如く性も氣質も共に天の賦與するものなれば之を以て天の命と稱するを得べし。朱子は理の命の氣の命を離れて存在するものにあらざるを説いて、

安卿問。命字有<sub>二</sub>專以<sub>レ</sub>理言者。有<sub>二</sub>專以<sub>レ</sub>氣言者。曰。也都相離不<sub>レ</sub>得。蓋天非<sub>レ</sub>氣。無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>命<sub>二</sub>於人。人非<sub>レ</sub>氣。無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>天所<sub>レ</sub>命。(朱子語類卷四、二十三頁)

纔說<sub>二</sub>性字。便是以<sub>二</sub>人所<sub>レ</sub>受而言。此理便與<sub>レ</sub>氣合了。但直指<sub>二</sub>其性。則於<sub>二</sub>氣中。又須<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>得別是一物。始得。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>混并說<sub>一</sub>也。(朱子文集卷六十二、二十三頁)

と云へり。氣の命を離れたる理の如きは到底吾人の思考するを得べからざるものなれども、氣質を離へずして本然の性を考へ得べきが如く。氣の命を離へずして理の命のみを抽象して考ふることを



得べし。故に天命に就ても理の命と氣の命との關係を云へば不離不雜の看法を以て説明することを  
得べきなり。

更に朱子の所謂理の命に就て考察するに、その中には吾人は天より道を與へられ及び道を行ふべき大任を與へられたるの意味あり。蓋し性は人生の根本原理にして見聞すべからざる微妙なるものなりと雖も、已に此の性あればその中には惻隱羞惡辭讓是非の理となりて發見すべきものを包含し、又父子の親となり君臣の義となり夫婦の別長幼の序朋友の信となるべきものを包容し、その他社會に對し國家に對し萬有に對して當に爲すべき道を含む。然れば吾人は此の如く所以然の理たる性を與へられたるのみならず、人生に於ける一切の所當然の理を有するは是れ亦天の命する所なりと謂はざるべからず。朱子は吾人の性中に四端萬善の理の與へられたることを説いて、

大凡天之生物。各付一性。性非有物。只是一箇道理之在<sub>レ</sub>我者耳。故性之所<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>體。只是仁義禮智。天下道理。不出<sub>レ</sub>於此。凡此四者。具<sub>レ</sub>於人心。乃是性之本體。方<sub>レ</sub>其未<sub>レ</sub>發。漠然無<sub>レ</sub>形象之可<sub>レ</sub>見。及<sub>レ</sub>其發而爲<sub>レ</sub>用。則仁者爲<sub>レ</sub>惻隱。義者爲<sub>レ</sub>羞惡。禮者爲<sub>レ</sub>恭敬。智者爲<sub>レ</sub>是非。隨<sub>レ</sub>事發見。各有<sub>レ</sub>苗脈。不<sub>レ</sub>相殺亂。所<sub>レ</sub>謂情也。(朱子文集卷七十四、二十頁)

と云ひ。又、

循<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>乎天<sub>一</sub>以生<sub>上</sub>者<sub>也</sub>。則事々物々。莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>自然各有<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之路<sub>一</sub>。是則所<sub>レ</sub>謂道也。蓋天命

之性。仁義禮智而已。循其仁之性。則自父子之親。以至於仁民愛物皆道也。循其義之性。則自君臣之分。以至於敬長尊賢亦道也。循其禮之性。則恭敬辭讓之節文皆道也。循其智之性。則是非邪正之分別亦道也。蓋所謂性者。無一理之不具。故所謂道者。不待外求。而無所不備。所謂性者。無一物之不<sub>レ</sub>得。故所謂道者。不<sub>レ</sub>假<sub>二</sub>人爲<sub>一</sub>。而無所不<sub>レ</sub>周。尤可以見<sub>二</sub>天命之本然<sub>一</sub>。初無<sub>二</sub>間隔<sub>一</sub>。而所謂道者。亦未<sub>二</sub>嘗不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>是也。是豈有<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>於人爲<sub>一</sub>。而亦豈人之所<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>哉。(中庸或問大全、七頁)

と云へり。性已に天命なれば性中具ふる所の一切の理はその所當然の理たる<sub>と</sub>必然の理自然の理たるを問はず、亦皆天の命する所にあらざる事なきは最も明かなるの理なり。而して此の理は天の命する所なれば之を實現すべきことは亦天の命する所なりと謂はざるべからず。天は徒に空々その理を與へたるのみにして之を實現することを命せざるの理なし。唯之を自覺すると否とに在るのみ。孔子の如きは能く之を自覺せられたるを以て五十而知<sub>二</sub>天命と叫ばれしなり。然るに吾人は此の如き天命を稟けながら之を實現するもの少きは何によりて然るかといへば氣質によるものと云はざるべからず。朱子此の理を解して以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>らく、

盖天命之性。率<sub>レ</sub>性之道。皆理之自然。而人物之所<sub>二</sub>同得<sub>一</sub>者也。人雖<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其形氣之正<sub>一</sub>。然其清濁厚薄之稟。亦有<sub>二</sub>不能<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>異者<sub>一</sub>。是以賢知者。或失<sub>二</sub>之過<sub>一</sub>。愚不肖者。或不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>及。而得<sub>二</sub>於

此者。亦不能無失於彼。是以私意人慾。或生其間。而於所謂性者。不免有所昏蔽錯雜。而無以全其所受之正。性有不全。則於所謂道者。因亦有所乖戾舛逆。而無以適乎所行之宜。(同上八頁)

蓋し理の命は氣質を離れて存するものにあらざるを以て氣質の爲めに阻碍せられ制限せらるゝを免れざる所あり。故に仁義禮智の性の如きその稟くる所の氣質の清濁厚薄によりてその發現に異同を生せざるを得ず。朱子の言に「大凡清濁厚薄之稟皆命也。所造之有淺有深。所遇之有應有不應。皆由厚薄清濁之不同。且如聖人之於天道。如堯舜則是性之。湯武則是身之。禹則入聖城而不優。此是合下所稟有清濁。而所造有淺深不同。其命雖如此。又有性焉。故當盡性。」(朱子語類卷六十一、七頁)と云へるもの即ち是れなり。理の命は此の如く氣質の爲めに制限せらるゝ所ありと雖も、吾人を主宰統攝するものは理の命なれば此に依りて理を窮め性を盡し以て天より與へられたるすべてを全うせざるべからず。此の如くにして能く性に有するすべての理を實現して以て天命を全うするものを名づけて聖人と云ふ。朱子此の天命を全うする聖人を描き出して以爲らく、

聖人氣質清純。渾然天理。初無入欲之私以病之。是以仁則表裏皆仁。而無一毫之不仁。義則表裏皆義。而無一毫之不義。其爲德也。固舉天下之善。而無一事之或遺。而其爲善也。

又極<sub>二</sub>天下之實<sub>一</sub>。而無<sub>二</sub>一毫之不<sub>レ</sub>滿。此其所<sub>下</sub>以不<sub>レ</sub>勉不<sub>レ</sub>思。從容中<sub>レ</sub>道。而動容周旋莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>禮也。(中庸或問大全、百三頁)

朱子は更に聖人の聖神功化の極を説いては、

蓋人生<sub>二</sub>天地之間<sub>一</sub>。稟<sub>二</sub>天地之氣<sub>一</sub>。其體即天地之體。其心即天地之心。以<sub>レ</sub>理而言。是有<sub>二</sub>二物<sub>一</sub>哉。故凡天下之事。雖若<sub>二</sub>人之所<sub>レ</sub>爲。而其所<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>之者。莫<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>天地之所<sub>レ</sub>爲也。又況聖人純<sub>二</sub>於義理<sub>一</sub>。而無<sub>二</sub>人欲之私<sub>一</sub>。則其所<sub>二</sub>以代<sub>レ</sub>天而理<sub>レ</sub>物者。乃以<sub>二</sub>天地之心<sub>一</sub>。而贊<sub>二</sub>天地之化<sub>一</sub>。尤不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其有<sub>二</sub>彼此之間<sub>一</sub>也。(同上、百十一頁)

と云へり。蓋し能く己の性を盡し人の性を盡し物の性を盡し天地位し萬物育し、以て天地の化育を贊するに至ると雖も、天より賦與せられたる性に有するすべての理を實現するにあらざるものなし。而して天が吾人に與ふるに此の如き理を以てしたる所に天の命を見るべきものあり。天命は吾人の理を外にして存するものにあらず。此れ朱子が理の命を言ふ所以の旨意なりとす。

(二)氣の命 次ぎに氣の命に就て考察するに朱子は氣の命を分つて二と爲せり。(一)は氣質の命にして、(二)は氣數の命是れなり。此の氣質の命と氣數の命とは其の間に殆ど相異なる所なきが如くなれども、仔細に考察すれば自ら異なる所あるを見るべし。氣質の命はその稟くる所の氣質の清濁昏明美惡純駁等により、或は聖賢となり或は愚不肖となるものを指し、氣數の命は宇宙に行はる

氣數の與へらへられて人の氣數となり、此れに由りて吉凶禍福貧富貴賤壽夭死生となるものを指す。朱子の言に、

性者萬物之原。而氣稟則有清濁。是以有賢愚之異。命者萬物之所同受。而陰陽交運。參差不齊。是以五福六極。值遇不一。(朱子語類卷四、二十三頁)

とあるは即ち此の理を説けるなり。その他語類に「先生説命有兩種。一種是貧富貴賤死生壽夭。一種是清濁偏正。智慧賢不肖」。(同上)とあるが如きも亦同一の意味を云へり。之を仔細に見れば二者の間に區別あるは明かなれども、其の實は同一の氣の命に就て區別したるものなれば共通の點あるは復た論を俟たず。所謂氣質の命は前節に於て之を述べたれば此こには其の理を論せずして氣數の命に就て考察すべし。

氣數の命は俗に所謂運命にして是れ亦二箇の意味あり。即ち一は人の死生壽夭の如き生命に關する天命を云ひ、一は吉凶禍福貧富貴賤の如き遭遇の命を云ふ。此の二箇の命は考察に便せんが爲めに區別したるに過ぎざれば、その根柢に至りては一に歸するものと謂はざるべからず。今先づ生命の命に就ていへば人の死生壽夭の如きは有生の初めに定まれるものにして氣を稟くること厚きものは長壽を保つを得べきも、氣を稟くること薄きものは夭死するを免れざるものゝ如し。故に朱子は

命稟於有生之初。非今所能移。天莫之爲而爲。非我之所能必。但當順受而已。(論語集注卷之六)

と云へり。然るに命には正命と正命ならざるものとあり。譬へば巖牆の下に立ちて之れが爲めに壓死せられ、又は罪惡を犯して桎梏の刑を加へられ、遂に殺戮せらるゝが如きは、人の意志の加はりたるものにして、自然の命數とのみ謂ふべからざれば孟子も之を正命にあらずと謂へり。然るに如何に人事を盡しても避くべからざるものは之を正命と謂はざるべからず。蓋し正命と正命ならざるとは人事を盡すと否とに在り。故に朱子は、

人固有命。只是不可不順受其正。如知命者不立乎巖牆之下。是。若謂其有命。却去巖牆之下立。萬一倒覆壓處。却是專言命不得。人事盡處便是命。(朱子全書卷四十三、三十三頁)

命之正者出於理。命之變者。出於氣質。要之皆天所付與。孟子曰。莫之致之致之而至於命也。但當自盡其道。則所值之命。皆正命也。(同上卷四十三、二十八頁)

所謂正命者。蓋天之始命我。如事君忠事父孝。便有許多條貫在裏。至於有厚薄淺深。這却是氣稟了。然不謂之命不得。只不正命。如桎梏而死。喚做非命不得。蓋緣它當時稟得箇乖戾之氣。便有此。然謂之正命不得。故君子戰兢。如臨深履薄。蓋欲順受其正者。而不受其不正者。且如說當死於水火。不成便自赴水火而死。而今只恁地看。(朱子語類卷四十二、十四頁)

と云へり。然らば殷の比干が忠を盡して死したるが如きも亦正命と稱すべきものにして、その人事

を盡したる所に比干の正命を見出すを得べし。若し人事を盡さざる所ありて自然の運命のまゝに任かすが如きことあらば正命と稱すべからず。是れ朱子が、

盡<sub>二</sub>其道<sub>一</sub>而死者皆正命也。當<sub>レ</sub>死而不<sub>レ</sub>死。却是失<sub>二</sub>其正命<sub>一</sub>。此等處當<sub>二</sub>活看<sub>一</sub>。孟子說桎梏而死者非<sub>二</sub>正命<sub>一</sub>。須<sub>二</sub>是看<sub>二</sub>孟子之意如何<sub>一</sub>。且如<sub>二</sub>公治長<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>縲紲<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>其罪<sub>一</sub>也。若當時公治長死<sub>二</sub>於縲紲<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>說他<sub>一</sub>不<sub>二</sub>是正命<sub>一</sub>。有罪無罪。在<sub>レ</sub>我而已。古人所<sub>二</sub>以殺<sub>レ</sub>身以成<sub>レ</sub>仁<sub>一</sub>。且身已死矣。又成<sub>二</sub>箇甚底<sub>一</sub>。直是要<sub>レ</sub>看<sub>二</sub>此處<sub>一</sub>。(同上卷四十三、三十三頁)

と云へる所以なり。然るに顔子の如き賢人は氣を稟くること豊厚なれば、長壽なるべき筈なるに却て短命にして死し、盜跖の如き悪人は氣を稟くること稀薄なれば、天死すべき筈なるに却て長壽を得たるは如何なる理由によるか。是れ皆氣數の然らしむる所にして人力の動かすべき所にあらずと云はざるべからず。朱子の門人鄒子上が朱子に質問して、

人生有<sub>二</sub>壽夭<sub>一</sub>氣也。賢愚亦氣也。壽夭出<sub>二</sub>於氣<sub>一</sub>。故均受<sub>レ</sub>生。而有<sub>二</sub>顔子盜跖之不<sub>レ</sub>同<sub>一</sub>。賢愚出<sub>二</sub>於氣<sub>一</sub>。故均性善而有<sub>二</sub>堯桀之或異<sub>一</sub>。氣有<sub>二</sub>清濁<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>長短<sub>一</sub>。其清者固所<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>賢<sub>一</sub>。然雖<sub>レ</sub>清而短。故於<sub>レ</sub>數亦短。其濁者固所<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>愚<sub>一</sub>。然雖<sub>レ</sub>濁而長。故其數亦長。(朱子文集卷五十六、三十八頁)

と云へるを朱子が是認せる所を見れば、朱子の説も亦此れと同じく人の賢愚の異なるを以て氣質の清濁昏明美惡純駁によるものとなし、壽夭の異なるを以て氣數の長短厚薄豊歉によるものとなした

ること明かなり。但此等の議論は皆常識的識見より出でたるものなれば多くを論ずる必要なかるべし。而して朱子が横渠の説を擧げて、

横渠云。所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>變者。惟壽夭耳。要<sub>レ</sub>之此亦可<sub>レ</sub>變。但大概如<sub>レ</sub>此。(朱子全書卷四十三、三十三頁)  
と云へるを見れば人の壽夭長短は有生の初に定まりて人爲を以て動すを得べからざるが如しと雖も幾分は人爲によりて變すべきものあるを認めたるが如し。然れども人事を盡して長壽を圖り猶死を免れざるは天命なりと云はざるべからず。

更に遭遇の命に就て考察するに朱子は氣を稟くることの豊厚なるものは富貴幸福を得べきも、氣を稟くること疎薄なるものは貧賤不幸を得べきものとせり。故にその言に、

敬子問<sub>ニ</sub>自然之數。曰。有<sub>レ</sub>人稟<sub>ニ</sub>得氣厚者<sub>一</sub>則福厚。氣薄者則福薄。稟<sub>ニ</sub>得氣之英華者<sub>一</sub>則富盛。衰颯者則卑賤。氣長者則壽。氣短者夭折。此必然之理。(朱子語類卷四、二十七頁)

人之稟<sub>レ</sub>氣。富貴貧賤長短。皆有<sub>ニ</sub>定數<sub>一</sub>寓<sub>ニ</sub>其中<sub>一</sub>。稟得盛者。其中有<sub>ニ</sub>許多物事<sub>一</sub>。其來無<sub>レ</sub>窮。亦無<sub>レ</sub>盛而短者。若<sub>下</sub>木生<sub>ニ</sub>于山<sub>一</sub>取<sub>レ</sub>之。或貴而爲<sub>ニ</sub>棟梁<sub>一</sub>。或賤而爲<sub>ニ</sub>厠料<sub>一</sub>。皆生時所<sub>レ</sub>稟氣數如<sub>レ</sub>此定了。(同上卷四、二十八頁)

と云へり。要するに人の富貴貧賤吉凶禍福は氣數によるものにして、その受くる所に厚薄あるは亦人爲によるものにあらずしてその間に何物か主宰するものありて然らしむるが如し。是れ天命と名



づくる所以なり。朱子が「富貴在<sub>レ</sub>天。非<sub>ニ</sub>我所<sub>レ</sub>與。如<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>一人爲<sub>ニ</sub>之主宰<sub>一</sub>然。」と云へるは即ち此の意味に外ならず。而して壽夭死生が有生の初に定まりたるのみならず。富貴貧賤の如き遭遇の命も亦有生の初めに定まりたるが如き感なき能はず。故に朱子は又、

死生是稟<sub>ニ</sub>於有生之初。不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>得而移。富貴是眼下有<sub>レ</sub>時適然遇着。非<sub>ニ</sub>我所<sub>レ</sub>能必。若推<sub>ニ</sub>其極。固是都稟<sub>ニ</sub>於有生之初。(同上卷四、二十三頁)

と云へり。蓋し富貴貧賤の如きは多少人力によりて動かし得るものゝ如くなれども、その人力によりて動かし得て貧賤のもの一朝變じて富貴となるは、是れ有生の初め已に定まりたるものなりとも云ひ得ざるにあらず。是れ朱子が「推<sub>ニ</sub>其極。固是都稟<sub>ニ</sub>於有生之初。」と云へる所以なり。然るに孔子の如き聖人は天地の清明中和の氣を得てその徳聖人の域に達し、氣に於て缺くる所なきにも拘はず貧賤なるは時運の然らしむるものなるか、稟くる所の氣數に豊厚ならざる所ありしかと云へば、その稟くる所の氣數に豊厚ならざる所ありしが爲めなりと云はざるを得ず。故に朱子は、

他那清明。也只管得<sub>レ</sub>做<sub>ニ</sub>聖賢。却管<sub>ニ</sub>不得那富貴。稟<sub>ニ</sub>得那高底。則貴。稟<sub>ニ</sub>得厚底。則富。稟<sub>ニ</sub>得長底。則壽。貧賤天者反<sub>レ</sub>是。夫子雖<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>清明者。以爲<sub>ニ</sub>聖人。然稟<sub>ニ</sub>得那底薄底。所<sub>ニ</sub>以貧賤。顔子又不<sub>レ</sub>如<sub>ニ</sub>孔子。又稟<sub>ニ</sub>得那短底。所<sub>ニ</sub>以又天。(同上卷四、二十六頁)

と云へり。此れに由りて之を觀れば聖人となり賢人君子となり愚者となり不肖者となるは、その氣

質の清濁美惡昏明純駁によるものにして、又死生も壽夭も吉凶禍福も皆氣數の豐歉厚薄によるものと謂はざるべからず。而して此の天命なるものは多くは有生の初めに定まりて人力を以て移すべからざるが如し。果して然らば朱子の説は一種の宿命説となることなきや。然るに宋儒の説く所に據れば吾人は一方に於ては氣の命を賦與せられて動かすべからざる所あるが如く感ずれども、一方に於ては理の命を賦與せられたるを以て、理の命を以て主と爲して以て氣の命を主宰統攝するときは全然その氣質を變化するを得ざるも幾分の變化を爲し得べからざることなかるべし。是れ宋儒に氣質變化の説ある所以にして氣の命を支配するものは理の命と云はざるべからず。張橫渠は此の理を説いて、

爲<sub>レ</sub>學大益。在<sub>二</sub>自求<sub>レ</sub>變<sub>二</sub>化氣質<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>爾皆爲<sub>二</sub>人之弊<sub>一</sub>。卒無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>發明<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>聖人之奧<sub>一</sub>。

(近思錄卷之二)

德不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>氣。性命<sub>二</sub>於氣<sub>一</sub>。德勝<sub>二</sub>其氣<sub>一</sub>。性命<sub>二</sub>於德<sub>一</sub>。窮<sub>レ</sub>理盡<sub>レ</sub>性。則性天德。命天理。氣之不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>變者。獨死生修天而已。(同上)

と云ひ、呂大臨も亦同じく氣質は徳性によりて變化すべきものとして、

君子所<sub>二</sub>以學<sub>一</sub>者。爲<sub>二</sub>能變<sub>二</sub>化氣質<sub>一</sub>而已。德勝<sub>二</sub>氣質<sub>一</sub>。則愚可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>於明<sub>一</sub>。柔者可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>於強<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>之。則雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>志<sub>二</sub>於學<sub>一</sub>。亦愚不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>明。柔不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>立而已矣。蓋均善而無<sub>レ</sub>惡者性也。

所<sub>レ</sub>同也。昏明強弱之稟。不<sub>レ</sub>齊者才也。人所<sub>レ</sub>異也。誠<sub>レ</sub>之者所<sub>下</sub>以反<sub>二</sub>其同<sub>一</sub>而變<sub>中</sub>其異<sub>上</sub>也。夫以<sub>二</sub>不美之質<sub>一</sub>。求<sub>二</sub>變而美<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>百<sub>二</sub>倍其功<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以致<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。今以<sub>二</sub>鹵莽滅裂之學<sub>一</sub>。或作或輟。以變<sub>二</sub>甚不<sub>レ</sub>美之質<sub>一</sub>。及<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>。則曰<sub>四</sub>天質不<sub>レ</sub>美<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>學所<sub>レ</sub>能變<sub>一</sub>。是果<sub>二</sub>於自棄<sub>一</sub>。其爲<sub>二</sub>不仁<sub>一</sub>。甚矣。(中庸章句)

と云へり。朱子が呂大臨の説に賛成して「某年十五六時。見<sub>下</sub>只與叔解<sub>二</sub>得此段<sub>一</sub>。快<sub>上</sub>。讀<sub>レ</sub>之未<sub>二</sub>嘗不<sub>レ</sub>竦然警厲奮發<sub>一</sub>。」と云へるを見れば、氣質變化の説に取る所ありしを知るべし。蓋し人の稟けたる氣の命の中に在りて變化し易からざるものは死生壽夭に關する生命にして、之に次ぐものは吉凶禍福に關する遭遇の命なり。而して之に次ぐものは貧富貴賤に關する遭遇の命にしてその次ぎは智愚賢不肖に關する氣質の命及び善惡正邪の如き氣質に關するものなり。然れども朱子が壽夭の如き天命すら此れ亦變すべしと云へる所を見れば、その他の氣の命に至りては理の命を以て主として同化せしむれば變化し得られざるものなかるべし。故にその要する所は理の命を以て氣の命を主宰統攝するに在りと云はざるべからず。朱子此の意味を説いて、

德性若不<sub>レ</sub>勝<sub>二</sub>那氣稟<sub>一</sub>。則性命只由<sub>二</sub>那氣<sub>一</sub>。德性能勝<sub>二</sub>其氣<sub>一</sub>。則性命都是那德。兩者相<sub>二</sub>爲勝負<sub>一</sub>。蓋其稟受之初。便如<sub>レ</sub>此矣。然亦非<sub>二</sub>是元地頭不<sub>レ</sub>渾全<sub>一</sub>。只是氣稟之偏隔著。故窮<sub>レ</sub>理盡<sub>レ</sub>性。則善反之功也。性天德。命天理。則無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>是元來至善之物<sub>一</sub>矣。若使<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>修爲之功<sub>一</sub>。則雖<sub>二</sub>聖

人之才。未<sub>レ</sub>必成<sub>レ</sub>性。然有<sub>二</sub>聖人之才<sub>一</sub>。則自無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>修爲<sub>一</sub>之理<sub>也</sub>。(朱子語類卷九十八、十一頁)

と云へり。蓋し宇宙の大法より云へば理と氣との間に於いて何れを重と爲し何れを輕しと爲すべきものにあらず。然るに人生に在りては性と氣とは同じく天より賦與せられたるものなりと雖も、もし立教の上より見ればその間に輕重貴賤の別なしと云ふべからず。是に於て性を以て貴とし重とし氣を以て賤とし從とし性によりて氣を率ゐる理の命によりて氣質を變化し以て理氣の調和統一を圖らざるべからず。是れ氣質變化の説ある所以なるべし。此れに由りて之を觀れば朱子の説は宿命説と異なり人生のすべてを天命(氣の命)に委ぬるものにあらずして、徳性の力によりて運命を支配するを得ると爲す徳性説なりと云はざるべからず。

## 第七章 心情論

### 第十八節 心の體用

朱子はもと宇宙と人生とを以て同一體なりと認めたるを以て、その宇宙論に於ける論法と人生論に於ける論法とは殆ど同一にして其の間に稍詳略の差あるのみ。故に吾人に於ける性と宇宙に於ける太極とを以て同一體のものとして爲し、又太極が動靜を包涵するが如く性も亦動靜を包涵するものと爲し、太極が未發已發の理を包容するが如く性も亦未發已發の理を包容するものと爲し、太極が眞

實無妄の理たると共に至善の理なるが如く、性を以て眞實無妄の理たると共に至善の理と爲すが如き即ち是れなり。而して此の論法は獨り本體論に於てのみ用ひたるにあらずして現象論に於ても亦之を用ひたり。宇宙の現象より云へば太極なる理は陰陽五行及び萬化萬象の中に存在して、而も陰陽五行及び萬化萬象なる氣を通じて顯現して宇宙の現象となるが如く、性は氣質形體の中に在りて而も氣質形體を通じて顯現して人生萬般の行爲事業となるものと認めたる所あり。故に其の説に、性猶<sub>三</sub>太極<sub>一</sub>也。心猶<sub>三</sub>陰陽<sub>一</sub>也。太極只在<sub>三</sub>陰陽之中<sub>一</sub>。非<sub>三</sub>能雜<sub>三</sub>陰陽<sub>一</sub>也。然至<sub>レ</sub>論<sub>三</sub>太極<sub>一</sub>。自是太極。陰陽自是陰陰。惟性與<sub>レ</sub>心亦然。所<sub>レ</sub>謂<sub>一</sub>一而二。二而一也。(朱子語類卷五、六頁)

と云へり。此れに據れば性は心の本體にして發して情となるが如く、宇宙に在りては太極は陰陽の本體にして發して陰陽なる氣となるものなれば、その關係は殆ど同一なり。但宇宙論に於けるものと人生論に於けるとは多少その用語を異にする所あるのみ。今二説を對比すれば左の如し。

心

情 性

人生の現象

天心

氣 理

宇宙の現象

余を以て之を見れば宇宙の現象を統一するものを以て陰陽と爲し、人生に於ける心と對比せしむるは稍穩當を缺くの感なきこと能はず。故に之に換ふる宇宙心又は天心を以てすれば人生に於ける心と宇宙に於ける宇宙心又は天心とは二者全く一致することゝなるべし。蓋し宇宙心又は天心は人生に於ける心の性情を統ふると同じく理と氣とを統ふるものにして、現象上より見れば太極なる理は宇宙心の體にして陰陽なる氣は宇宙心の用と爲すを得べければなり。

(甲)心の定義。心とは如何なるものなるかと云ふに朱子は心を解釋して左の如く云へり。

心者人之神明。所<sub>下</sub>以是<sub>二</sub>衆理<sub>一</sub>。而應<sub>レ</sub>萬事<sub>上</sub>者也。(孟子集注卷之七)

然るに朱子は大學に所謂明德に就ても殆ど此れと同一の解釋を爲せり。その言に、

明德者人之所<sub>レ</sub>得<sub>三</sub>乎天<sub>一</sub>。而虛靈不昧。以具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>。而應<sub>二</sub>萬事<sub>一</sub>者也。(大學章句)

とあるもの即ち是れなり。朱子の此の定義の中には凡そ三箇の意味を含めり。即ち第一は心なるものは人の神明即ち虚靈不昧なること。第二は心の中には衆理を具有すること。第三は心は萬事に應じて能く活動すること是れなり。

(第一) 朱子は或は心者人之神明と云ひ或は明德者虚靈不昧と云ひ、其語を異にすれども其の意味同一にして神明は心の靈妙不可測にして昭明不昧なるを云ひ、虚靈不昧は心の虚靜靈妙にして昭明不昧なるを云へるものなれば其の意味異なるものにあらず。蓋し虚とは心裏の空虚にして物事の

存在せざるを意味するものなれども絶対に空虚なるにあらずして、只私心物欲の存在せざるを云ふものなれば、私心物欲の存在せざる所に天理の存在することを意味することゝなるべし。而して靈とは心裡に存する理の氣を通じて顯現して靈妙不可思議なる活動を爲すを意味す。蓋し虚靈不昧又は神明は統體の上より心を解し、具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>應<sub>三</sub>萬事<sub>一</sub>は體用を分説したるものにして、惟虚なるを以て衆理を具へ惟靈なるを以て萬事に應ずるを得るものなれば、具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>應<sub>三</sub>萬事<sub>一</sub>は虚靈不昧の四字（又は神明の二字）の裡面に含まるゝものと謂ふを得べし。更に虚靈の二字を以て云へば、虚は體にして靈は用に屬し、具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>は體にして應<sub>三</sub>萬事<sub>一</sub>は用に屬すれども、定義の全體より云へば虚靈不昧（又は神明）は心の本質を意味し、具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>應<sub>三</sub>萬事<sub>一</sub>は虚靈不昧（又は神明）の内容を示したるものと謂ふべし。蓋し天命賦する所の性は人物の間てなしと雖も、唯人は正通の氣を受けて以て生れその精英なるものに心に聚まるを以て、其の賦與せらるゝ所の理之れと妙合して以て光明正大の徳を爲し物の能く興る所にあらず。故に其中能く衆理を具へて缺くる所なく能く萬事に應じて備はらざる所なきを得るなり。朱子此の義を説いて以爲らく、

虚靈自是心之本體。非<sub>三</sub>我所<sub>一</sub>能<sub>三</sub>虚靈<sub>一</sub>也。耳目之視聽。所<sub>三</sub>以<sub>一</sub>視聽者即其心也。豈有<sub>三</sub>形象<sub>一</sub>。然耳目以視<sub>三</sub>聽之<sub>一</sub>。則猶有<sub>三</sub>形象<sub>一</sub>也。若<sub>三</sub>心之<sub>一</sub>虚靈。何嘗有<sub>レ</sub>物。（朱子語類卷五、五頁）

靈底是心。實底是性。靈便是那知覺底。如下<sub>レ</sub>向<sub>三</sub>父母<sub>一</sub>則有<sub>三</sub>那孝<sub>一</sub>出來。向<sub>レ</sub>君則有<sub>三</sub>那忠<sub>一</sub>出來。

這便是性。如<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>道事<sub>レ</sub>親要<sub>レ</sub>孝。事<sub>レ</sub>君要<sub>レ</sub>忠。這便是心。張子曰。心統<sub>ニ</sub>性情<sub>一</sub>者也。此說得最精密。(同上卷十六、九頁)

蓋道只是合當<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>此。性則有<sub>ニ</sub>一箇根苗。生<sub>ニ</sub>出君臣之義父子之仁。性雖<sub>レ</sub>虛都是實性。心雖<sub>ニ</sub>是

一面。却虛故能包<sub>ニ</sub>容萬物。這箇要<sub>ニ</sub>人自體察<sub>一</sub>始得。(同上卷十六、七頁)

此れに據れば吾人に在りて無形の理と氣の精英なる者と妙合して心となれば、その方寸の間空洞物なくして衆理を具へ、而して其の中能く知覺するものありて萬事に應じて謬らざるの實あることを知り得べし。

(第二) 朱子が吾人の心の裡にすべての道理(所以の理及び當然の理)を具備せるものと爲せるは、太極論に於て太極なる理が陰陽の中にも五行の中にも又萬化萬象の中にも存するものと爲せると同一の論法にして、吾人亦宇宙の一物なればその他の物と同じく太極なる理を賦與せられてその性と爲せり。故に凡そ人たるものは一人として理を具へざるものなし。前に述べたる人々本然の性を具ふと云ふは此の理に外ならず。朱子が、

心性兩箇。說<sub>ニ</sub>著一箇。則一箇隨到。元不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>相離。亦自難<sub>ニ</sub>與分別。捨<sub>レ</sub>心無<sub>ニ</sub>以見<sub>レ</sub>理。捨<sub>レ</sub>性又無<sub>ニ</sub>以見<sub>レ</sub>心。故孟子言<sub>ニ</sub>心性。每々相隨。說<sub>ニ</sub>仁義禮智是性。又言<sub>ニ</sub>惻隱之心。羞惡之心。辭遜之心。是非之心。更細思量。(同上卷五、六頁)



心與理一。不<sub>下</sub>是理在<sub>三</sub>前面爲<sub>中</sub>一物。理便在<sub>三</sub>心之中。心包蓄不<sub>レ</sub>住。隨<sub>レ</sub>事而發。因笑云。說到<sub>レ</sub>此自好笑。恰似<sub>三</sub>那藏<sub>一</sub>相似。除<sub>三</sub>了經函。裏面點<sub>レ</sub>燈。四方八面。皆如<sub>レ</sub>此光明燦爛。但今人少<sub>三</sub>能看如<sub>レ</sub>此。(同上卷五、六頁)

心以<sub>レ</sub>性爲<sub>レ</sub>體。心將<sub>レ</sub>性做<sub>三</sub>餛子模樣。蓋心之所<sub>三</sub>以具<sub>三</sub>此理<sub>一</sub>者。以<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>性故也。(同上卷五、七頁)  
 と云へるが如き皆此の理を説けるなり。吾人の心裡に本來此の理(性)を具ふるを以て能く外に應じて種々の道徳行爲をなし社會の事業をなすを得べし。而して能く外に發見するものは即ち情にして心の動的作用に屬するものと謂はざるべからざるなり。

(第三) 第二と第三との關係をいへば具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>は心の體にして未發の靜に屬し、應<sub>三</sub>萬事<sub>一</sub>は心の用にして已發の動に屬す。更にいへば具<sub>三</sub>衆理<sub>一</sub>は性にして應<sub>三</sub>萬事<sub>一</sub>は情なり。蓋し心の本體に衆理を具ふるを以て能く萬事に應ずるを得るのみならず、又能く之を主宰して宜しきを得しむるを得べし。故に朱子は、

明德是自家心中。具<sub>三</sub>許多道理<sub>一</sub>在<sub>三</sub>這裡。本是箇明底物事。初無<sub>三</sub>暗昧<sub>一</sub>。人得<sub>レ</sub>之則爲<sub>レ</sub>德。如<sub>三</sub>惻隱羞惡辭讓是非<sub>一</sub>。是從<sub>三</sub>自家心裡<sub>一</sub>出來。觸<sub>三</sub>著那物<sub>一</sub>。便是那物出來。何嘗不<sub>レ</sub>明。緣<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>物欲<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>蔽。故其易<sub>レ</sub>昏。如<sub>三</sub>鏡本明<sub>一</sub>。被<sub>三</sub>外物點汗<sub>一</sub>。則不<sub>レ</sub>明了。少間磨起。則其明又能照<sub>レ</sub>物。

(同上卷十四、十五頁)

と云へり。其の他孺子の井に入らんとするを見て怵惕惻隱の心の起り來るは情の作用にして、もと性中の仁より發したるものなれども、之に應じて孺子を救濟して死に至らざらしむるは心の主宰する所に屬す。故に情は自然の發現なれども心は自然の發現により之を主宰して宜しきを得しむるものなり。是れ朱子が「心者一身之主宰。情者心之所動。」と云ひ、「性有許多道理。昭々然者屬心。未發理具。已發理應則屬心。動發則情。所以存其心。則養其性。心該備通貫主宰運用」と云へる所以なり。故に心はその具ふる所の理を主宰し運用するの作用をも含むものと謂はざるべからず。

(乙)心統性情。朱子は常に張橫梁の所謂「心統性情」の説を以て眞理として之を取れるのみならず。又程伊川の所謂「心一也。有指體而言者。寂然不動者是也。有指用而言者。感而遂通天下之故是也。惟觀其所見何如耳。」(近思錄卷之二)の説に従へり。蓋し此の二説はもと同一の意味を説けるものにして、伊川の所謂有指體而言者。寂然不動是也は橫梁の所謂性に當り、有指用而言者。感而遂通天之故是也は橫梁の所謂情に當れるものなり。故に朱子は、

舊看五峰說。只將心對性。說一箇情字。都無下落。後來看橫梁心統性情之說。乃知此話有三大功。始尋得箇情字着落。與孟子說一般。孟子言惻隱之心。仁之端也。仁性也。惻隱情也。此是情上見得心。又曰仁義禮智根于心。此是性上見得心。盖心便是包得那性情。

性是體。情是用。心字只一箇字母。故性情字是從心。(朱子語類卷五、十頁)

人多說性方說心。看來當先從心。古人制字亦先制得心字。性與情皆從心。以人之生言言之。固是先得道理。然才生這許多道理。却都具在心理。且如仁義。自是性。孟子則曰仁義之心。惻隱羞惡自是情。孟子則曰惻隱之心羞惡之心。盖性卽心之理。情卽性之用。今先說一箇心。便教人識得箇情。性底總腦。教人知得箇道理存着處。若先說性却似性中別有一箇心。橫渠心統性情一語極好。(同上卷五、十頁)

と云へり。此れに據れば心は一身の主宰にしてその本體に具はれる性と性より發現する情とを統一包容するものなれば、性は心の性情は心の情と謂はざるべからず。而して性と情との關係を云へば性は體にして情は用なり。又性は寂然不動の靜的のものなれども情は感而遂通する動的のものなりと謂ふべし。更にいへば性は惻隱羞惡辭讓是非の情となりて發現すべき理を有しながら未發の状態にあるものなれども、情は惻隱羞惡辭讓是非の情となりて現はれ來る已發の状態を云ふ。而して心は體用動靜未發已發を包容統一するものにして之に對すべきものもあることなし。故に朱子は惟心無對と云へり。盖し心はその裡に性情を包容統一し知情意を兼該包括して一も遺す所なきを以て絶對的のものとなせるなり。更に朱子の言に據りて心性情の關係を擧ぐれば、

性以理言。情即發用處。心卽管攝性情者也。故程子曰。有指體而言者。寂然不動是也。

此言性也。有指用而言者。感而遂通是也。此言情也。(同上卷五、十三頁)

心有體用。未發之前。是心之體。已發之際。乃心之用。如何指定說得。蓋主宰運用底便是心。性便是會恁地做底理。性則一定在這裡。到主宰運用却在心。情是只幾箇路子。隨這路子。恁地做去底。却又<sub>レ</sub>是心。(同上卷五、九頁)

心者主宰之謂也。動靜皆主宰。非<sub>下</sub>是靜時無<sub>レ</sub>所用。及<sub>レ</sub>至動時<sub>二</sub>方有<sub>レ</sub>主宰<sub>上</sub>也。言<sub>二</sub>主宰<sub>一</sub>則混然體統。自在<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>。心統攝性情。非<sub>下</sub>儻侗與<sub>二</sub>性情<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>一體<sub>一</sub>。而不<sub>レ</sub>分別也。(同上卷一、十三頁)

と云へり。此れに據れば心は朱子のいへるが如くも包含該載敷施發用底の物にして人生一切の理も事も包含するものなれば、心統性情と云へる張橫渠の説は動かすべからざるものなり。而してその心の裡に包含せらるゝ性は心の體にして人生凡ての理すべての事の根本原理なること前に述ぶるが如し。而して情は心の用にして根本原理たる性より發現して現象となれるものを云ふ。然るに此の情は性に對しては用なれども行爲に對する時は體にして行爲は用となる。又性は體にして根本原理なれば形象聲臭の言ふべきものなき寂然不動の靜なるものなれども、その裡には動となりて現はるべきものを有する靜なり。故に事に接し機に觸るれば感じて遂に通じ活動して行爲事業となりて社會に現はれて來るべし。之を名づけて情と云ふ。故に情は心の動也と云ふべきものにして心の全體の作用を指すものなれば、感情又は情緒情操と云ふが如き心の中の一作用を指すものにあらず

して、今日の心理學にて云ふ所の知情意全體の作用を指す。是れ朱子が情を解して「心之動也」と云へる所以なり。朱子は又心の未發已發に就て云へらく、

心統性情。故言心之體用。管跨過兩頭未發已發處一說。仁之得名。只專在未發上。惻隱便是已發。却是相對言之。(同上卷五、十三頁)

心之全體湛然虛明。萬理具足。無一毫私欲之間。其流行該徧。貫動靜而妙用又無不在焉。故以其未發而全體者一言之則性也。以其已發而妙用者一言之則情也。然而心統性情。只就渾然一物之中。指其已發未發而爲言爾。非是性是一箇地頭。心是一箇地頭。情又是一箇地頭。如<sub>レ</sub>此懸隔也。(同上卷五、十三頁)

人之一身。知覺運動。莫<sub>レ</sub>非心之所爲。則心者固所以主於身。而無動靜語默之間者也。然方其靜也事物未<sub>レ</sub>至。思慮未<sub>レ</sub>萌。而一性渾然道義全具。其所謂中是乃心之所<sub>レ</sub>以爲體。而寂然不動者也。及其動也。事物交至。思慮萌焉。則七情迭用。各有<sub>レ</sub>攸<sub>レ</sub>主。其所謂和是乃心之所<sub>レ</sub>以爲用。感而遂通者也。然性之靜也。而不能<sub>レ</sub>不動。情之動也。而必有<sub>レ</sub>節焉。是則心之所<sub>レ</sub>以寂然感通周流貫徹。而體用未<sub>レ</sub>始相離者也。(朱子文集卷三十二、二十七頁)

此れに據れば心は動靜未發已發を包容するものにして吾が心の本體即ち性の湛然虛明なるに當りては萬理具足して一も缺くる所なく、外物の之れに觸ることなくば寂然不動にして一念の微と雖も

起ることなし。その時に當りては心體少しも偏倚する所なきを以て之を稱して中と謂ふ。然るに一旦外物に接するや一念動きて萬念繼ぎ起ること、恰も一波起りて萬波動くが如し。之を稱して已發の情と謂ふ。而してもと偏倚する所なき本體そのまゝ現はるゝときはその發するや節に中らざるなし之を稱して和と謂ふ。故に心なるものは此の未發已發の中和を包容統一するものにしてその能く中和を得るものは心の主宰宜しきを得るによると謂ふべし。

以上は主として心統性情の形式的方面に就て述べたれども、更にその内容に就て考察すれば、心の中には仁義禮智の性と惻隱羞惡辭讓是非の情とを包容するものにして、延いては父子の親君臣の義夫婦の別長幼の序朋友の信となり、天下社會萬般に於ける行爲事業となるもの一として心に本づかざるものなし。朱子の言へる、

問ニ性情心。曰。橫渠說得最好。言心統性情者也。孟子言惻隱之心仁之端。羞惡之心義之端。極說ニ得性情心ニ好。性無ニ不善。性所レ發爲レ情。或有ニ不善。說ニ不善非ニ是心ニ亦不レ得。却是心之本體。本無ニ不善。其流爲ニ不善ニ者。情之遷ニ于物ニ而然也。性是理之總名。仁義禮智。皆性中一理之名。惻隱羞惡辭讓是非。是情之所レ發之名。此情之出ニ於性ニ而善者也。其端所レ發甚微。皆從ニ此心ニ出。故曰心統性情者也。此不<sub>レ</sub>是別有<sub>ニ</sub>一物在<sub>ニ</sub>心裡。心具<sub>ニ</sub>此性情。心失<sub>ニ</sub>其主。却有<sub>レ</sub>時不善。(朱子語類卷五、十一頁)

は即ち此の理を説けるものなり。然るに側隱羞惡辭讓是非の情の如きはもと性なる理より發現したるものなれば善なること論を俟たざれども、此の他に氣より發する喜怒哀樂愛惡欲（或は喜怒哀懼愛惡欲とも云ふ）の七情ありて此の七情の作用の過不及によりて或は惡に流るゝことあり。蓋し四端はもと喜怒哀樂愛惡欲の七情の外に出でず。七情も亦四端の外に出づるものにあらざれば本來同一の情なれども、その發する所以に異なる所あるを以て之を分ちたるに過ぎず。故に朱子は四端七情の關係に就て左の如く云へり。

問。喜怒哀懼愛惡欲是七情。論來亦自性發。只是怒自羞惡發出。如喜怒哀欲。恰都自側

隱上發。曰。哀懼是那箇發。看來也只是從側隱發。蓋懼亦是怵惕之甚者。但七情不可分

配四端。七情自於四端一橫貫過了。（同上卷八十七、十七頁）

怒畢竟屬義。義屬陰。怒與惡皆羞惡之發。所以屬陰。愛與欲相似。欲又較深。愛是說這物事好可惡而已。欲又是欲得之於己。（同上卷八十七、十七頁）

問。七情分配四端。曰。喜怒哀惡是仁義。哀懼主禮。欲屬水則是智。且巍恁地說。但也難分。（同上卷八十七、十七頁）

此れに據れば四端と七情とは強いて牽合するを得ざれども大概を以て云へば側隱の心は喜愛の情に屬し、羞惡の心は惡怒の情に屬し、辭讓の心は哀懼の情に屬し、是非の心は欲の情に屬するものと

爲すを得べしと雖も此の分配は決して正確なるものと謂ふべからず。是れ朱子に「七情不可分配ニ四端」と云へる議論ある所以なり。然るに四端七情は性より發し來るものなるか、氣より發し來るものなるかに就て議論あり。朱子は四端は理の發にして七情は氣の發なりと爲して、

四端是理之發。七情是氣之發。問。看得來如喜怒哀惡欲。却似近仁義。曰。固有相似處。

(同上卷五十三、二十二頁)

と云へり。然るに孟子に所謂「惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。辭讓之心。禮之端也。是非之心。智之端也。」(孟子公孫丑章句上)及び禮記禮運篇に「何謂人情。喜怒哀懼愛惡欲七者。弗學而能。」(禮記章句卷之四、四十頁)と云ひ、程伊川が「其中動而七情出焉。曰喜怒哀懼愛惡欲。情既熾而益蕩。其性斲矣。」と云へる所に據れば朱子が四端を以て理の發と爲し七情を以て氣の發と爲したるは正確の見と謂ふべきが如し。故に汪雙池の如きは、

情者心之用而已。心合理與氣以爲體。四端以下其自性體一直發出。不離乎氣。而不雜於氣者言也。七情以氣之知覺。而物至知知者言也。(理學逢源卷一、二十四頁)

と云ひ以て朱子の説に賛意を表せり。然るに陳北溪は「孟子四端是專就善處言レ之。中庸喜怒哀樂及七情等是含善惡説。」(字義詳講卷上、三十頁)と云ひ、又李栗谷も亦「四端專言理。七情合理氣。」(五賢粹言卷一、五頁)と云ひ七情に於ては朱子の言に異議を挾めり。蓋し孟子の言へる四端の心は



理の發を主として云へることは何人も疑ふべからざる所なり。而して中庸に「所謂喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。」と云へるが如きは是れ理の發を以て主を爲せるものなるを以て之を大本と云ひ達道と云へり。然るに禮運にいへる所及び程伊川のいへる所の如きは主として氣より發するものを以て云へるものなれば、或は不善に流るゝことなきにあらず。若し孟子及び中庸禮運等を離れて汎く一般の心理狀態に就て云へば四端を以て理の發七情を以て氣の發とのみ云ふべからざるに似たり。故に朱子が四端に就て、

惻隱羞惡。也有中節不中節。若不當惻隱而惻隱。不當羞惡而羞惡。便是中節。

(朱子語類卷五十三、九頁)

と云ひ、陳北溪が喜怒哀樂の情に就て、

情者心之用。人之所不能無。不<sub>二</sub>是箇不好底物。但其所<sub>三</sub>以爲情者。各有當然之則。如下當喜而喜。當怒而怒。當哀而哀。當樂而樂。便合箇當然之則。便是發而中節。便是其中性體流行。而著見於此。即便此謂之達道。(字義詳講卷上、二十九頁)

と云へるが如く四端の發にも氣その主となることあり七情の發にも理その主となることあるを見るべし。故に此の論は一概に論ずるを得べからずと雖も、多くの場合に在りては四端は専ら理を主として云ひ、七情は理と氣とを合せ云ふものと見るは穩當の見たるを失はず。而して惡なるものは何

によりて起るかど云へば朱子は七情中の欲によるものとして心性情欲の關係を説いて、

性是未<sub>レ</sub>動。情是已動。心包<sub>二</sub>得已動未動。蓋心之未<sub>レ</sub>動則爲<sub>レ</sub>性。已動則爲<sub>レ</sub>情。所<sub>レ</sub>謂心統<sub>二</sub>性情也。欲是情發出來底。心如<sub>レ</sub>水。性猶<sub>二</sub>水之靜。情則水之流。欲則水之波瀾。但波瀾有<sub>二</sub>好底。有<sub>二</sub>不好底。欲之好底。如<sub>二</sub>我欲<sub>レ</sub>仁之類。不好底則一向奔馳出去。若<sub>二</sub>波瀾翻浪。大段不好底欲。滅<sub>二</sub>却天理。如<sub>二</sub>水之壅決。無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>害。孟子謂情可<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>善。是說<sub>下</sub>那情之正從<sub>二</sub>性中<sub>一</sub>流出來者。元無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>好也。(朱子語類卷五、十二頁)

と云へり。蓋し欲なるものは他の情と同じく善惡を以て言ふべきものにあらざれども、性に本づくものは所<sub>レ</sub>謂仁を欲し義を欲するの欲となりその欲する所節に中りて善となるべく、氣に本づくものは或は不仁を欲し不義を欲するの欲となりその欲する所節に中らずして惡となるを免れず。故に惡なるものは氣に過不及ありて生ずるものにして本來存在するものにあらざるは前に述ぶる所の如し。此れに由りて之を觀れば性のまゝ現はれて情となるときは善なれども、人欲の私起りて過不及を生ずるときは惡となるものなれば心に善惡ありと謂はざるべからず。但心の中に善と惡との二元並び存するの意味にあらざるは勿論なりと雖も、人欲の爲めに累はさるゝときは惡の生ずるものなれば心に惡なしと謂ふべからず。是れ朱子が「惡固非<sub>二</sub>心之本體。然亦是出<sub>二</sub>於心<sub>一</sub>也。」と云へる所以なり。然るに善に趨かしむると不善に趨かしむるとは心の主宰すると否とによる。心は統<sub>二</sub>性情

ものなれば只性情を包容するに止まらず。之を統一主宰するの任務あり。故に朱子は「蓋主宰運用底便是心。」と云ひ、又「心即統攝性情者也。」とも、「心該備通貫主宰運用。」とも云ひ以て心の性情を主宰運用するの任務あるを説けり。朱子は更に之を詳説して以爲らく、

感<sub>ニ</sub>於物<sub>一</sub>者心也。其動者情也。情根<sub>ニ</sub>乎性<sub>一</sub>。而宰<sub>ニ</sub>於心<sub>一</sub>。心爲<sub>ニ</sub>之宰<sub>一</sub>。則其動也無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>節矣。

何人欲之有。惟心不<sub>レ</sub>宰。而情自動。是以流<sub>ニ</sub>於人欲<sub>一</sub>。而每不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>其正<sub>一</sub>也。然則天理人欲之判。

中<sub>レ</sub>節不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>節之分。特在<sub>ニ</sub>乎心之宰與<sub>ニ</sub>不宰<sub>一</sub>。而非<sub>ニ</sub>情能病<sub>レ</sub>之亦已明矣。蓋雖<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>節。

然是亦情也。但其所<sub>ニ</sub>以中<sub>レ</sub>節者乃心爾。今夫乍見<sub>ニ</sub>孺子入<sub>レ</sub>井<sub>一</sub>。此心之感也。必有<sub>ニ</sub>怵惕惻隱之

心。此情之動也。内<sub>レ</sub>交要<sub>レ</sub>響。惡<sub>ニ</sub>其聲<sub>一</sub>者。心不<sub>レ</sub>宰而情之失<sub>ニ</sub>其正<sub>一</sub>也。怵惕惻隱。乃仁之端。

又可<sub>下</sub>以<sub>ニ</sub>其情之動<sub>一</sub>。而遽謂<sub>中</sub>之人欲<sub>上</sub>乎。(朱子文集卷三十二、七頁)

此れに據れば善は心の主宰する所宜しきを得るによるものにして、不善は心之れを主宰せずして情の動くがまゝに任せて人欲の私に陥るによるものと謂はざるべからず。

然るに心はもと性情を統ふるものにしてその用たる情は現象已發のものなれども、その本體たる性は未發の實在なる所より云へば心は理に屬すべきか氣に屬すべきか如何。此れに就て朱子は性を

以て理と爲し心を以て氣と爲せり。その言に曰く、

心者氣之精爽。(朱子語類卷之五、四頁)

心之理是太極。心之動靜是陰陽。(同上三頁)

心之官至靈。藏<sub>レ</sub>往知<sub>レ</sub>來。(同上四頁)

蓋し心は太極にあらず。心の理即ち是れ太極なれども、發して情となるや舒あり慘ありて喜樂の如きは陽にして哀愁の如きは陰なれば、「心之理是太極。心之動靜是陰陽」と云へるなり。且此の如く朱子が心者氣之精爽と云ひ、心之動靜是陰陽と云ひ、又心之官至靈と云へる所を見れば、たとひその裡に衆理を具ふるものあるもその發用を主として云ふときは、心を以て氣とするは正當の見と謂はざるべからず。故にその他にも、

問。靈處是心。抑是性。曰靈處只是心。不<sub>二</sub>是性<sub>一</sub>。性只是理。(同上)

問。知覺是心之靈固如<sub>レ</sub>此。抑氣之爲邪。曰。不<sub>二</sub>專是氣<sub>一</sub>。是先有<sub>二</sub>知覺之理<sub>一</sub>。理未<sub>二</sub>知覺<sub>一</sub>。氣聚成<sub>レ</sub>形。理與<sub>レ</sub>氣合。便能知覺。譬如<sub>二</sub>這燭火<sub>一</sub>。是因<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>這脂膏<sub>一</sub>。便有<sub>二</sub>許多光燄<sub>一</sub>。問。心之發處是氣否。曰。也只是知覺。(同上)

と云へる言あり。心の靈は理と氣との妙合の然らしむる所にして心の知覺亦然り。蓋し心の靈心の知覺するは靈なる所以の理知覺する所以の理の氣を通じて現はれたるによるものにして、靈なる所と知覺する所とは即ち氣によるものと謂はざるべからず。此の議論は前に述べたる鬼神の説と同一にして、鬼神はもと理氣の妙合によりて成れるものなれども、その理の氣を通じて現はれて至靈至

妙なる活動を爲す所を云ふものなれば氣に屬するものと謂はざるべからざるが如し。故に鬼神を以て非<sub>レ</sub>理非<sub>レ</sub>氣中間のものど爲すべからざるが如く心を以て非<sub>レ</sub>理非<sub>レ</sub>氣中間のものど爲すべからず。李栗谷は「性理也。心氣也。先賢於<sub>二</sub>心性<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>合而言<sub>レ</sub>之者<sub>一</sub>。孟子曰。仁人心是也。有<sub>二</sub>分而言<sub>レ</sub>之者<sub>一</sub>。朱子曰。性者心之理也。」(近思續錄卷一、五頁)と云ひ、宋尤菴も亦同じく「以<sub>レ</sub>理對<sub>レ</sub>心而言。則性爲<sub>レ</sub>理。而心爲<sub>レ</sub>氣。以<sub>レ</sub>心對<sub>レ</sub>氣而言。則心爲<sub>レ</sub>理。而形爲<sub>レ</sub>氣。蓋心雖<sub>二</sub>是氣<sub>一</sub>。而該<sub>二</sub>貯此理<sub>一</sub>。故或謂<sub>レ</sub>理或謂<sub>レ</sub>氣。」(同上十四頁)と云へり。汪雙池の説く所亦同じ。曰く「凡獨言<sub>レ</sub>性則性兼<sub>二</sub>理氣<sub>一</sub>言。以<sub>レ</sub>性對<sub>レ</sub>心言。則性專是理。心專是氣。心之所<sub>二</sub>以成<sub>レ</sub>形致<sub>レ</sub>用者<sub>一</sub>。皆氣之爲也。」(理學蓬源卷一、四十頁)と蓋し性心相對して云へば性を以て理と爲し心を以て氣と爲すは朱子の本旨を得たるものと謂ふべし。惟ふに心はもと二五精秀の氣によりて成れるものにして此の氣の主たる所以のものは無極の眞五常の理たる性なり。氣は以て理を載せ理は以て氣の主となり二者相妙合して一となり以て靈妙なる活動を爲すもの是れ心なり。而して人生に於ける一切の合理的行動事業は此の理氣妙合の心によりて成れるものにして一として心より遁るゝものあることなし。是れ心の至靈至妙なる所以なり。